

国際子ども図書館 の窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第6号
2006.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

<国際子ども図書館の2005年>



皇后陛下、展示会「ロシア児童文学の世界」をご観覧（9月8日）



展示会「ロシア児童文学の世界」



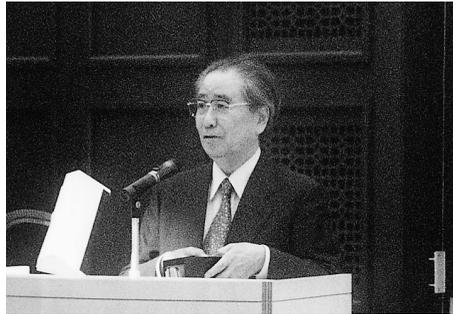
講演会「十二支と日本人」
講師：大島 建彦氏 (1月22日) p.39



子ども読書の日行事
「子どもといっしょに絵本の世界へ」
講師：中村 柁子氏 (4月23日) p.40



講演会「ロシア児童文学の思い出」
講師：三木 卓氏 (5月28日) p.40



講演会「ロシアの絵本を日本の子どもに」
講師：松居 直氏 (9月3日) p.40



春休みおたのしみ会 (3月26日・27日) p.42



科学あそび
「見えないものを見てみようーゴム風船を
使った空気の実験」(8月6日・7日) p.43

国際子ども図書館の窓 第6号

<目次>



口絵 国際子ども図書館の2005年

はじめに	=村山 隆雄	2
シンポジウム報告		
「バリアフリー図書の普及を願って－図書館と出版の協働」		3
第一部 基調講演		
「やさしく読める図書の出版－スウェーデンの経験から」	=ブロール・トロンバッケ	5
第二部 報告と討論から	=攪上 久子	13
展示会「ロシア児童文学の世界」	=「ロシア児童文学の世界」展示班	19
展示会「ロシア児童文学の世界」に寄せて		
「パリーモスクワ」児童文学の交流	=末松氷海子	23
平成17年度「児童文学連続講座－当館所蔵資料を使って」を終了して		
－総合テーマ「日本児童文学の流れ」－	=企画協力課協力係	28
世界の児童書－蔵書紹介－		
国際子ども図書館コレクションから「ちりめん本」	=江口 磨希	30
国際子ども図書館ホームページのリニューアル		
	=企画協力課企画広報係	31
児童書デジタルライブラリーと児童書総合目録の公開資料拡大		
	=資料情報課	32
出張報告 マレーシア、タイ、インドの図書館訪問記		
	=増田 利恵	34
 福岡から上野に来て	=坂梨 秀子	36
活動報告		37
数字で見る！国際子ども図書館		45
これから…		50
利用案内		51

はじめに



国際子ども図書館は、「桃、栗」の草創期を過ぎ、早、「柿」が実をつける頃に入りつつあります。次の「梅」の時代に備えなければなりません。

外部有識者から成る「国際子ども図書館の図書館奉仕に関する調査会」は、昨年度、国立国会図書館長からの諮問「国際子ども図書館が児童書のナショナルセンターとして今後拡充発展させるべき図書館奉仕の方向性」を審議し、その答申を、平成17年3月に提出しました。現在、国際子ども図書館は、その答申に基づき、施設とサービスの拡充を視野に入れた「国際子ども図書館拡充基本計画」を策定しています。現行の蔵書数（25万冊）、書庫の容量（40万冊）に年間の資料増加数（2万5千冊）を勘案しながら、説得力のある計画の策定を着実に進めてまいります。

さて、この1年をかけ足で振り返ってみます。平成17年2月から3月にかけて、マレーシア、タイ、インドに若い職員を在外研究員として派遣し、アジア各国における児童サービスの現状と児童書出版事情の調査にあたらせました。国際子ども図書館からの在外研究員は初めてのことでした。昨年度初めて開催した児童文学連続講座「ファンタジーの誕生と発展」の講義録を編集・刊行し、全国の図書館に配布しました。昨年10月に開催の児童文学連続講座「日本児童文学の流れ」も多彩な講師陣と多くの参加者を得て好評でした。子どもと本をつなぐ仲介者への支援活動の一環ですが、全国の仲介者と私ども職員が互いに学びあう場という意味でも重要な講座です。日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催で、シンポジウム「バリアフリー図書の普及を願って」を開催した事は「読書の楽しみをすべての子どもたちに」を考えていく機会となりました。展示会では、ロシア児童書展「ロシア児童文学の世界」、財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）との共催による野間国際絵本原画コンクール入賞作品展「ゆめいろのパレットⅡ」を開催しました。子どもの本の魅力を様々な視点で紹介する展示会の開催は職員の資質向上の機会ともなっています。また、ホームページのリニューアルにあわせ、懸案であった英文ホームページを開設することができました。今後もホームページのような「プル型」の媒体と『国際子ども図書館の窓』のような「プッシュ型」の媒体を効果的に組み合わせ、国際子ども図書館からの情報発信に努めます。

国際子ども図書館の活動は、最終的にはすべて、子どもが読書の喜びを身に付け、健やかに生き抜く力に収斂されなければなりません。この1年の私たちの活動は、その目標に沿っていましたでしょうか。「桃、栗」の時代を暖かく見守っていただいた皆様へ感謝し、「柿」の実が熟すよう、「梅」の花を咲かせることができるよう怠りのない準備をお誓いしながら、『国際子ども図書館の窓』第6号をお届けいたします。

2006年2月

国立国会図書館国際子ども図書館長 村山 隆雄

シンポジウム報告

「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」

平成17年7月20日(水)、国際子ども図書館3階ホールにて、シンポジウム「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」を開催しました。このシンポジウムは、社団法人日本国際児童図書評議会(JBBY)との共催により7月から9月にかけて開催した「読書の楽しみをすべての子どもたちに」と題する催物の一環です。「世界のバリアフリー絵本展」(7月21日~24日開催)と「日本のバリアフリー図書の歩み」(7月21日~9月4日開催)の二つの展示会とともに、すべての子どもたちが読書の楽しみに巡りあうための課題とその解決法について、図書館と出版の協働のなかで考えるために、開催したものです。

図書館、出版、養護学校などの関係者103名の参加があり、村山隆雄国際子ども図書館長の挨拶に続き、第一部ではスウェーデンやさしく読める図書センター所長ブロール・トロンバック氏の基調講演、第二部では攪上久子氏(JBBY世界のバリアフリー絵本展実行委員長)をコーディネーターとして、4人の講師による日本のバリアフリー図書に関する報告とトロンバック氏を交えた質疑・討論が行われました。

第一部基調講演および第二部討論を、攪上久子氏にまとめていただきましたので、次に掲載いたします。

シンポジウム

「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」

平成17年7月20日 国際子ども図書館3階ホール

第一部 基調講演「やさしく読める図書の出版—スウェーデンの経験から」

講師 ブロール・トロンバック (Bror Tronbacke)

第二部 討論

コーディネーター かくあげ 攪上久子

【報告】

- ◆山内 薫「日本の障害のある子どもたちへの図書館サービスの歴史と展望」
- ◆脇谷邦子「大阪府立中央図書館の取組み—図書館とわんぱく文庫のいい関係」
- ◆鴻池 守「バリアフリー図書の出版を手がけた経験から」
- ◆高倉嗣昌「障がいのある子どものための本作りと普及」

■基調講演・ディスカッション報告者紹介■

ブロール・トロンバック (Bror Ingemar Tronbacke)

ウプサラ大学院にて文学修士・理学修士を取得、ストックホルム大学にて法律学、文化地理学を修める。スウェーデン政府商務省、法務省、教育文化省等に勤務。現在、やさしく読める図書センター (Centrum för lättläst: The Centre for Easy-to-Read) 所長。やさしく読める図書分野での開発と提供を主な業務とし、1984年よりやさしく読める図書関連の発行に従事し、異なったメディアでのやさしく読める図書の活用、及びこの概念を発展させようと務めてきた。また、国際図書館連盟 (IFLA) 障害者サービス分科会常任委員として、「やさしく読める図書に関するガイドライン (Guidelines for easy-to-read materials)」(1997年) 作成の中心的役割を果たし、やさしく読める図書を国際的にも普及させてきた。

山内 薫 (やまうち かおる)

1969年から墨田区立図書館に勤務し、現在は緑図書館に勤務。日本図書館協会障害者サービス委員会委員。著書に『拡大写本の作り方』(東京ルリユール 1987年) 等、共著に『障害者サービス』(日本図書館協会 1996年) 等多数。

脇谷邦子 (わきや くにこ)

1967年から大阪府立図書館に勤務し、現在は中央図書館に勤務。論文に「決意を示した大阪府子ども読書活動推進計画」(「図書館雑誌」97(6))、著述に『最新図書館用語大辞典』(柏書房 2004年) 児童サービス関連項目等多数。

鴻池 守 (こうのいけ まもる)

偕成社編集部長として乳幼児から小学生向きの絵本、障害者への理解を広げ、優しさをはぐくむ絵本、小学生向き国語辞典・漢字辞典、小学・中学生向き自然科学・社会科学啓発書などの編集に携わる。現在はフリーランス編集者兼編集企画プロダクション牧童社主宰。

高倉嗣昌 (たかくら つぐまさ)

北海道大学医療技術短期大学部助教授を経て、1994年から北海学園大学経済学部教授。1994年から財団法人ふきのとう文庫理事、2004年から理事長。

攪上久子 (かくあげ ひさこ)

国公立の盲・養護学校で様々な障害のある子どもの教育療育に携わる。現在昭島市、立川市等の母子保健事業の心理相談員。臨床発達心理士。2001年から2005年まで日本国際児童図書評議会理事。

寺尾三郎 (てらお さぶろう) <通訳>

スウェーデン在住。新聞社印刷工場に勤務のかたわら、ウプサラ市公認通訳・ガイドを務める。翻訳に LL ブック『リーサのたのしい一日』、『山頂に向かって』(愛育社 2002年)。

シンポジウム報告「バリアフリー図書の普及を願って」

第一部 基調講演

「やさしく読める図書の出版

ースウェーデンの経験から」

ブロール・トロンバッケ

(通訳) 寺尾 三郎

*トロンバッケ氏はパワーポイント画像や、やさしく読める図書の实物を提示しながらお話してくださいました。



私はやさしく読める図書センター（以下 LL センター）（注1）のブロール・トロンバッケです。スウェーデンから来ました。今回で来日は3回目になりますが、国立国会図書館から招聘していただいたことに感謝しております。

世の中には「やさしく読める」ことを必要とする人たちが沢山います。障害がある方たちばかりでなく、高齢者の中にも「やさしく読める」テキスト

を必要とする方がいます。そういう人たちに対して私たちはどういことができるのでしょうか。スウェーデンをはじめ、他の国にも「やさしく読める」本を出している国がありますが、これから、「やさしく読める」ことについて、「やさしく読める」とはどういうことなのか、なぜ「やさしく読める」ことが必要なのか、どんな人たちが「やさしく読める」ことを必要としているのか、「やさしく読める」テキストを作るとはいったいどういうことなのか等についてお話したいと思います。また、「やさしく読める」ニュースのことや「朗読代理人制度」のこと、さらにそこから生まれているネットワークについてもお話したいと思います。

■ 「やさしく読める」とは

「やさしく読める」とはどういうことかと言いますと、やさしく読めるようにするために内容・言語・絵・レイアウトなどに工夫をすることです。大事なことはこの四つを組み合わせることで、あるいはそういう工夫をしてほかの媒体（メディア）に変換する方法です。では、一体なぜ「やさしく読める」ことが必要なのでしょうか。まず、最初に言えることは、障害の有無にかかわらず誰もがデモクラシーの権利を持っているということです。そして身近な社会に参加する権利を有し

ているということです。「やさしく読める」情報を受けることによって、社会に近づき、参加していくことができます。そうした「生活のクオリティ」ということが大事です。全ての人たちが読めるということは大事なことです。というのも、本を読むということは、様々な人たちの考え方を知ることにもなるからです。本を読むことによって、社会での討論にも加わることができます。そしてまた、自分自身で読めるということは、自信を持つことにもつながります。

■「正確に読めない」人たち

世界の人の読み書きの力について概観してみましよう。「正確に読めない」人たちの割合は20～25%といわれていますが、これはスウェーデンに限らず他の国、例えばイギリス、アメリカの人たちにも言えます。またフランス、ドイツ、ポーランドといった国々でも調査いたしましたが、ほとんどの国が、20～25%の割合で「正確に読めない」人たちがいることがわかりました。その「正確に読めない」という基準は、中学卒業相当のレベルに達していないものとして調査をいたしました。それは、本に限らず日常のニュースを読めないということにもなります。読むことはできて、時には大事な情報を逃してしまうこともある、という人たちに対しては、普通のテキストよりもよりやさしいテキストが必要です。10～15%の人たちが、そういう「やさしく読める」本、あるいは活字を必要としています。

■「やさしく読める」ことを必要としている人たち

大きく分けて二つのグループがあります。一つは障害のある人たちのグループです。例えば、知的障害者、ディスレクシア（難読症ともいわれる学習障害の一種）、学習障害を伴う注意欠陥多動性障害、自閉症、先天性聴覚障害、認知障害などの人たちです。どういう障害かということに関わらず「やさしく読める」テキストを必要とする子どもたちもいます。こういう人たちがおよそ7～8%います。

もう一つの大きなグループとして、使われている言語への理解力や読解力の乏しい人たちがいます。それは、移民して聞かない人たち、あるいは、教育を十分に受けなかったり受けられなかったりという理由で、読み書きができない人たちです。学校へ行っている子どもたちの中にも、同様の理由で読めない子どもたちがいます。こういう人たちの割合は6～7%です。

■「やさしく読める」テキストを作るとは

「やさしく読める」テキストには古い歴史があります。「やさしく読める」テキストを作るにあたっては、LLセンターのスタッフだけではなく、研究者あるいはそれに関わる人たちの協力もあります。批評しあいながら、しっかり調査をして作ることが大事です。

私たちはどのように作るかというガイドラインを持っています。まず具体的に記

述することが大事です。そして論理的であること。つまりその物語を時間の流れに沿って把握できること、さらに、直接的かつシンプルであることが必要です。また、登場人物を少なくするというのも考慮します。象徴的な言いまわしは避けます。

大事なことは、簡潔に、短く意味を伝えることです。例えば、一つのできごとだけを伝えるようにしたり、難しい言葉は避けるようにします。複雑なことは、具体的かつ論理的に記述します。

そして公に出版する前に、試験的に調査することも大事です。著者、読者、出版者で、話し合いを持ちます。知的障害者も読める本を作ることに対して、そういう話し合いの場を持つということは、とても大事なことだと思っています。というのはその知的障害者のためだけに作るのではなくて、他の障害者も同じように「やさしく読める」テキストを読むことができるようになるからです。そして、テキスト、写真、絵だけではなく、そこにピクトグラム（注2）を導入することによって、一層わかりやすくすることができます。

■レイアウト

テキストは、そのレイアウトも重要です。大事なことは、わかりやすく魅力的なものであることです。そして、間隔をとった大きめの文字であること、長い文を使わないこと、見やすい字体であることも大事です。見やすいということは、はっきりと読めるということです。英字の場合、文字サイズとして12~14ポイントの大きさが適当だと私たちは判断しています。そしてまた、十分なコントラストをとることも大事です。例えば、背景と活字のコントラストです。

その例として、この本をご覧ください。この本は片方のページに写真を載せ、もう一方のページにテキストを載せています。字も普通より大きくなっており、間隔もとってあります。文はなるべく短めにしてあります。そして単純な写真を載せるようにしています。

■絵の大切さ

絵は大事な要素です。絵やイラストは、文を読むにあたって理解を深めるために役立ちます。具体的な絵や写真を見せることによって内容が把握しやすくなります。大事なことは、絵が文と一致していることです。絵と文が一致していなかったり、絵が小さすぎると、読者を迷わすこととなります。

■「やさしく読める」レベル

「やさしく読める」本は一つだけのレベルではなく、やさしさのレベルが分かれています。色々なグループの人たちが、三つにレベル分けされた本を、読めるようになっていきます。私たちはその三つのレベルで本を作るのが普通です。その三つのレベルについてはまた後で触れます。

■あらゆるメディアへの対応

「やさしく読める」ということは、本だけに限りません。他の色々なメディアに対しても必要です。「やさしく読める」新聞、あるいは雑誌も必要です。官庁から来る通知も、やさしく読みやすいものに変換し、情報を伝えることが必要です。また、テレビ、ラジオ、ビデオの番組に関しても、「やさしく読める」ことが大事です。現在では、マルチメディア DAISY 図書（注3）もずいぶん普及してきていて、日本もそうだという感じを受けましたが、これも必要です。マルチメディア DAISY 図書は、視覚障害者に対して作られているものが標準になっています。ウェブサイト、CD-ROM、DVD 及び他のデジタルメディアに対しても、「やさしく読める」ことが必要です。先程申し上げましたピクトグラムも大事な材料の一つです。

■国際的ルールとガイドライン

国際的ルールとガイドラインについて触れます。LL センターの役割に関して申しますと、国連の「障害をもつ人びとの機会均等化に関する基準規則」は私たちの業務を支援するものです。国連の規則では障害のある人たちも文化的活動に参加できるべきであり、そのために「やさしく読める」テキストを読む機会が必要であると謳われています。UNESCO 公共図書館宣言には、図書館がその手助けをするべきであり、障害のある人たちに限らず、使用されている言葉を理解することが困難な人たちに、特別な配慮が必要であると述べられています。「やさしく読むこと」に対する IFLA のガイドライン（注4）にも「やさしく読める」本が必要な人たちへの配慮が謳われています。図書館あるいは図書館で働く司書たちが、「やさしく読める」図書について知り、障害のある人たちに情報を伝える役割を担うことが大事だと考えます。私は各国の会議に出席していますけれども、他の各国でも図書館がイニシアチブを取って、「やさしく読める」図書に率先して取り組んでいます。

■スウェーデンにおける歩み

「やさしく読める」本が刊行されるまでに、スウェーデンでどのような経過があったかを、少し話したいと思います。スウェーデンに「やさしく読める」図書の機関ができたのは1968年です。1968年には「やさしく読める」図書（LL ブック）の作業が、教育に関する国家機関である学校庁の管理下で試験的にスタートしました。その当時は、ある特殊なグループが出版者との協力のもとに出版作業を担当しました。

1984年には公的な機関「音読新聞委員会」が、理解力のある障害者や他のグループで、「読むことが難しい」人たちにどうしたらニュースを伝達することができるか、という調査を始めました。視覚障害者だけでなく、その他の障害のある人たちに対しての調査も含まれました。その時、試験的に作られたのが『8ページ』という新聞です。その試みは1年間ほど続けられ、その後、週刊となりました。

同時に国会決議により LL センターが作られました。新聞や「やさしく読める」図書の刊行など、業務内容に関する規則も決めました。「やさしく読める」図書刊行に際して1991年に、独自の出版社 LL 出版を発足させました。その時、私は国会からの委任を受けて、審議院で調査をしておりました。そして、LL センターに入ったわけです。

その後、1992年には「朗読代理人制度」という活動を試験的に始めました。障害のある人たちの中で、他の人から代わりに読んでもらうことを必要とする人たちのことを考えて、そういう活動をするようになったわけです。この制度では、「朗読代理人」が一緒に図書館に行って、読みたい本を代読することも行っています。また、会社、官庁の依頼を受けて、「やさしく読める」図書についての広報パンフレット類も作っています。どのようにして「やさしく読める」テキストを作るかというノウハウを教える研修も行っています。

つまり、①「やさしく読める」図書の出版、②『8ページ』の刊行、③ノウハウ、④「朗読代理人」という四つの部門に分かれて LL センターは活動しています。市場調査も行っております。現在のところ、27人ほどが私の所で働いています。日本円にして年間4億2千万円が予算に充てられています。そしてその半分は国庫補助です。国庫補助無しには、本の売り上げや他の営利だけで LL センターの運営を賄うのは困難です。

■ LL センターの役割と原則

LL センターの役割は、読解力に困難のある人々や、読むことに慣れていない読者に情報を与え、文献がやさしく楽に利用できるように支援することです。

その原則となるものはデモクラシーです。そしてアクセシビリティ、つまり利用のしやすさ、社会参加への援助です。これらが私たちの原則となっています。

■ スウェーデンルールとガイドライン

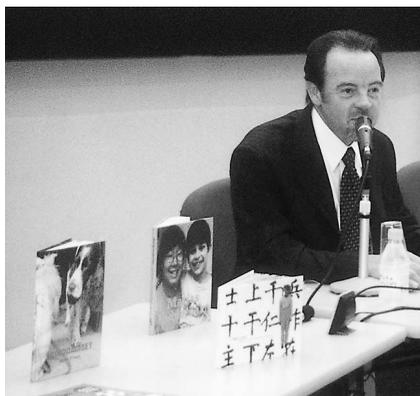
スウェーデンにおいては、スウェーデン独自のルールとガイドラインがあります。例えば、官庁からの情報に対してあらゆる人々が障害があろうとなかろうと一情報を受ける権利を持っているわけです。官庁としても、ただ情報を与えるだけでなく、全ての人たちに情報を理解させる責任を負っているわけです。スウェーデンには、障害のある人たちの権利を守る法律があります。障害者に対しての、サポートやサービスの享受を権利として保障するということです。国家として、障害のある人たちに他の人たちと同じサービス、身体的なことに限らず精神的な面でも同じサービスの享受を保障しています。

■ なぜ特別な機関が必要なのか

それでは、なぜ LL センターのような特別な機関が必要なのでしょう。それ

はまず、色々な能力を持っている人たちを集めることができるからです。LLセンターでは、出版社からの依頼で出版するだけでなく、出版する前に特別な研究者等との話し合いのもとに、調査も行います。そういう場合には特殊な能力や知識が必要です。新聞あるいは本に限らず、あらゆるメディアに対して、専門家のもとで作ることがたやすくできるようにもなります。社会に対する情報に関しても、同じことが言えます。マーケティングの調査は、本を作ったり、あるいは「やさしく読める」本についての広報と同じように大事なことです。それがなぜ「やさしく読める」テキストが必要か、ということの基礎にもなります。そしてまた、一つの機関があることは、他の機関とのコンタクトがしやすくなります。国からの援助を受ける際も、一つの機関ということがプラスになっています。そしてさらに、他の機関と協力しやすいということも重要なことです。

■「やさしく読める」本



私たちは「やさしく読める」本に関して色々なタイプの本を作っています。例えば、小説や推理小説も作っています。あるいは歴史の本、詩の本も作っています。その本は私たち独自で作る場合もありますし、かつて出版された本を作り直すこともあります。そして、本を作る場合、先程三つのレベルがあると言いましたが、それによって分けるわけです。

毎年約30冊の「やさしく読める」本を出版しております。現在のところ「やさしく読める」テキストで作った本は、約

600冊あります。子どもたちを対象にした本も作っております。そういう本を出版する場合、初版で1,000～5,000冊作ります。版を最も重ねた本の中には、12,000～13,000冊にのぼった本もありました。多く出版した本は、よく知られた推理小説や有名作家の本です。他には『日常の法律』という本も多く刷りました。その後、この『日常の法律』という本は、色々なグループが利用できることがわかりました。また障害のあるなしに関わらず、子どもたちにも利用されることがあります。知的障害者を対象にした本も作っておりますが、部数はそれほど多くはありません。そういう本の場合は、だいたい1,000～1,500冊くらいです。たとえ出版数が少なくとも、そういう本も、あるグループにとっては必要な本だと私たちは考えています。

「やさしく読める本」の三つのレベルについて、画像で示しながら説明いたしますよう。

レベル1の本 『正しい方法』

これはレベル1の本の一例です。レベル1がもっとも「やさしく読める」本のレベルです。タイトルが示しているように、どうしたらいいかということ、絵を多く使って表した本です。「やさしく読める」レベル1の本には、CD-ROM やピクトグラムを使っています。

レベル2の本 『リーサの楽しい一日』(邦訳あり)

レベル1、あるいはレベル2に所属する本です。この本は、いわゆる乗り物サービスを必要とする人についての物語です。一日の生活が書いてあります。リーサの一日の出来事です。これは写真を多くして、テキストを少なめにしています。そしてまたピクトグラムをつけています。

レベル2の本 『デザイン：昔と現在』

これはデザインについて書かれた本です。この本は色々なグループに購入されました。例えば、高校あるいは大学で、デザインのコースを選んでいる生徒たちです。「やさしく読める」本を必要としない人たちも、こういう本を購入することがあるということで、例に挙げました。

レベル2の本 『世界の子どものシリーズ』

私たちが最近作っているものに、『世界の子どものシリーズ』というレベル2の本があります。こういう本をシリーズとして出版しております。これもまた写真を多くし、テキストを少なめにしております。

レベル2の本 『世界の子どものシリーズ：アフリカの子ども』

これも同じシリーズです。アフリカの子どもの本です。このようにテキストと写真が片方ずつのページに分かれ、テキストも短くなっております。

レベル3の本 『ロミオとジュリエット』

古典を私たちが作り直した本の一つの例です。このような古典は、購入層が幅広いです。

レベル3の新聞 「やさしく読める」新聞『8ページ』

「やさしく読める」新聞を紹介します。この新聞は週1回刊行しています。日常読まれるニュースをもとに、やさしく書いてあります。写真を多く載せてあり、テキストも簡単に書かれていますが、内容は普通の新聞と同じです。(クロスワードの記事を紹介しながら) これはスウェーデンではやっているのですけれども、いわゆる日本でいうクロスワードも載せています。また子ども用のクロスワードもたいへん人気があります。このテーブルの横に展示しておきますので、見たい人は後でご覧になって下さい。この新聞はインターネットでも見られるようになっています。

■「やさしく読める」本の購入者

私たちが作った本を、いったいどういう人が買ってくれるのかということについて述べたいと思います。一番多く購入してくれるのは、施設や研究所、学校、そし

て図書館です。例えば、学校図書館だけで、だいたい私たちが出版する60%のシェアを占めています。あと介護機関、病院や高齢者住宅も、結構多く購入されています。そしてまた多くはないですけども、個人の方も購入されています。

■電子メディア

最後に電子メディアについてちょっと触れます。インターネットでのウェブサイト、DAISY 方式による音声本、ウェブでの音読紙を作っております。簡単に操作できて、中身をやさしく伝えられるように努めております。スウェーデンではスウェーデン録音図書点字図書館 (The Swedish Library of Talking Books and Braille) という機関が主にマルチメディア DAISY 図書を作っています。

最後まで聞いてくださってどうもありがとうございました。

(注1) HP アドレスは <http://www.llstiftelsen.se/>

※「やさしく読める図書」とは「lättläst」、英語では「Easy-to-Read Books」。「LLブック」とも言う。

(注2) 文字や音声言語の理解の難しい知的障害・肢体不自由・自閉症の子どもたちのコミュニケーションの手段として開発された視覚シンボル。絵文字。

(注3) DAISY (Digital Accessible Information System) は、障害者も共に使えるマルチメディアの国際標準規格の名称。マルチメディア DAISY 図書は音声とテキスト、画像をシンクロ (同期) させてパソコンで表示するもの。

(注4) Guidelines for easy-to-read materials / compiled and edited by Bror I. Tronbacke under the auspices of the IFLA Section of Libraries Serving Disadvantaged Persons IFLA Headquarters. c 1997 <UE11-A53>



シンポジウム報告「バリアフリー図書の普及を願って」 第二部 報告と討論から

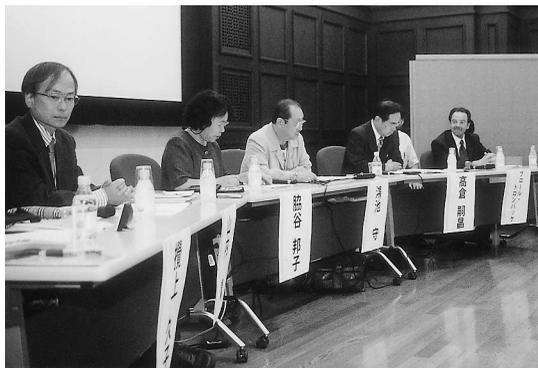


コーディネーター
攪上 久子氏

このシンポジウムのコーディネートをさせていただくにあたってめざしたことは、国際児童図書評議会(IBBY)障害児図書資料センター企画、JBBY 主催の「世界のバリアフリー絵本展」の国内での最終展示と、国内初の試みとしての日本におけるバリアフリー図書と図書館での障害者サービスの歴史を年代別に示した展示「日本のバリアフリー図書の歩み」という二つの展示会との有機的つながりのある内容にすること。そして困難や課題の多い分野だからこそ、具体的な一歩が踏み出せるようなディスカッションをめざすことであった。

「世界のバリアフリー絵本展」の43タイトルの展示は、多様なニーズに対して43通りの問題解決方法やアプローチを提案している。絵本展日本招聘にあたり、特に日本に紹介しなかったアプローチは、本を読むことが難しい人たちにとって必要な「視覚言語を加えるアプローチ」と「やさしく読める(Easy-to-read) 図書—スウェーデンの LL ブックの取り組み」であった。それに関して、基調講演の講師プロール・トロンバッケ氏は、私たちにたくさんのことを伝えてくださった。何よりもそこには福祉先進国スウェーデンが歩んできた、社会に生きるさまざまな人の権利を尊重するための社会の努力がある。人のすばらしさは、解決に向かって努力することであると、あらためて感じる講演であった。

国内の報告は、展示「日本のバリアフリー図書の歩み」と響きあうように、図書を作る側からお二人、図書館サービスからお二人にお願いした。



【報告】

「日本の障害のある子どもたちへの図書館サービスの歴史と展望」

山内 薫（東京都墨田区立緑図書館）

山内氏からは日本の図書館の障害児サービスの歩みや現状・課題をご報告いただいた。

日本における公立図書館の障害者サービスは、1970年、東京都立日比谷図書館での視覚障害者に対する録音朗読、その後の対面朗読が始まりとされている。同じ年に結成された視覚障害者読書権保障協議会が、翌年の全国図書館大会で提起したアピールにより、「視覚障害者の読書に関するサービスは、身体障害者福祉法の中で厚生援護施設として位置付けられている点字図書館ではなくて、社会教育行政の範疇で、公立図書館で行われるべきだ」との論議が展開された。同時に「読書権」が主張され、それは基本的人権、生存権の一部であり、人間の文化的生活を維持発展させていく上で必要不可欠な権利であるとの考えが大きくこの問題を前進させた。さらにそれらを受けて、図書館や資料が利用できないのは利用者の側の問題なのではなくて図書館側の問題なのだ、という図書館としての考え方の転換があった。しかし、誰もが「読書権」を主張できるわけではなく、幼い子どもや、重度の障害のある方にとっては、個々の人に応じたサービスや資料が提供されなければ、読んだり、あるいは楽しんだりする権利は保障されない。そうした意味で、図書館が親や周囲の大人、あるいは出版界などを巻き込んで積極的に取り組んでいかなければならない大きな課題である。

そして、障害のある子どもたちへのサービスに対する取り組みは、さわる絵本や布の絵本、拡大写本などを作るボランティア団体が、公立図書館のサービス開始と同時期の1970年ごろからまず活動を始め、それら在野のグループと公立図書館の連携によって障害のある子どもたちのための資料が全国的に広がってきた。また、入院している子ども、聴覚障害児、矯正施設入所の子どもなどに対するサービス、特別な教育的支援を必要としている子どもたちなど、徐々にその他の多様なニーズに対しても図書館が目を向けてきている。だが、おそらくどこの図書館でも相当数の利用があると思われる、知的障害の子どもたちにどういったサービスや資料が提供できるかが、今私たちが抱えている一番大きな課題ではないか。

山内氏の報告から、サービスそのものは思った以上に多岐に渡ってきたが、それらはまだ、個々の図書館や意識の高い図書館員の努力にゆだねられていることを改めて感じた。様々なサービスがどこの図書館でも受けられるようになること、そしてそうした図書館サービスの充実が、バリアフリー図書活性化にもつながっていくのであろう。

「大阪府立中央図書館の取組み—図書館とわんぱく文庫のいい関係」

協谷 邦子（大阪府立中央図書館）

協谷氏は視覚障害児のためのわんぱく文庫を図書館で受け入れ、ボランティアと連携して一人一人の心にそったサービスを展開している様子をご報告された。

わんぱく文庫は1981年に始められた視覚障害児のための文庫である。文庫が移転先を探していた1990年、新設される中央図書館で受け入れられないかという提案を受けた。図書館の中の施設を民間の特定の団体に提供することは簡単なことではなかったが、すべての子どもたちに読書の喜びを与えることが図書館人としての使命だと思い、中央図書館での受入れを実現させた。わんぱく文庫とは細かな業務の取り決めを行っている。

わんぱく文庫の受入れで、大阪府立図書館の視覚障害児に対するサービスが大きく広がった。子ども資料室の一角の、点字の児童書と点訳絵本が開架されている場所では、視覚障害の子どもたちが、見える子どもたちと同じフロアで本を選んだり、第2・第4土曜日のわんぱく文庫のおはなし会では、見える子と見えない子が一緒におはなしを楽しんだり、時には見えない子どもが点字絵本を使って、見える子どもたちに絵本の読み聞かせをしたりといった光景が展開されている。学校で「障害」について学習しているからと、クラスメイトと見るために点訳図書や点字絵本を借りていたり、府立図書館から点訳図書の貸出しの申込みがあったり、ある自治体からは、視覚障害の子どもがいる幼稚園のために、定期的に点字絵本の貸出依頼があったりした。見える子と見えない子の両方を対象にした「科学教室」や、2001年から毎年、子どもを対象にした「子ども点字教室」などを開催している。わんぱく文庫が入ってから「本を置くだけではダメなのだ」ということを実感している。文庫にいるボランティアの「人」の存在が、ぬくもりのあるサービスを実現している。

ハード面で施設や設備がどんなにバリアフリーになっても、全てのニーズに対応することは不可能だろうが、周りの人の向きあおうとする心が、その不足を補うだろう。すべての子どもたちに本の楽しみを届けるためには、本そのものの存在だけではなく、「ひと」がそこにいてこそ、個々のニーズに応じられるということを経えられた報告であった。

「バリアフリー図書の出版を手がけた経験から」

鴻池 守（編集者）

鴻池氏は編集者として、日本のバリアフリー図書出版のパイオニアであるが、そのバリアフリー図書出版の一端の紹介や、出版社個々の力では出版は難しく、共同出資による研究開発機関をつくる必要があるとお話をしてくださった。

「読書の楽しみをすべての子どもたちに」といっても本がなければ、その喜びも享受できない。布の絵本などの図書館での貸出点数が非常に多いという報告があったが、図書館や福祉の現場で使われているそうしたものが、ほとんどボランティアの人の手によって作られている。今ここに出版社の方がたくさん来られていると思うが、みんな同じ人間なのに、障害のある人のための本というものを、今まで作ってこなかったのではないかと訴えたい。障害のある人がいるということ、観念的にはわかっている、一般の出版人は実際に障害のある人たちとふれあうチャンスを持たない、あるいは積極的に持とうとしない。作る側の人たちの意識の問題があるのではないか。

『これ、なあに？』という本を出版したとき、盲児たちからは「初めて僕の絵本が持てて嬉しい」という感想が寄せられた。私には重度の知的障害をもった子が一人いる。身の回りにおもしろい本がたくさんあっても、知的障害児への新しい絵本の世界が広がってこない。そういう子にも何か方法がないのかということを考えていた。たまたまその頃「ふきのとう文庫」の布で作った絵本と出会った。「これはすごい。おもしろい本だ」と感動し、同時に、「布の絵本を出版できないのか？」という相談も受けた。いざ出版しようとして、人件費や材料費等を計算してみると、その当方で1万円以上、2万円ぐらいになってしまう。それではたくさん売れるはずもない。そこで、『手づくり布の絵本』という布の絵本の作り方を紹介する本の企画を思い立った。

バリアフリー図書のような本の出版は、出版社の利益にはつながりにくい。だから心ある編集者が「やりたい」と思っても、所属する出版社の範囲内ではなかなかできない。そこで、出版社の共同出資によりバリアフリー図書研究開発基金をつくり、心ある編集者や図書館の人たち、障害児の教育関係者が集まって、ニーズに答えるような作品を作るためのバリアフリー図書研究開発所のような機関を作ることはできないだろうか。

鴻池氏のお話には会場から共感の大きな拍手が起こった。出版の実情を知り尽くし開拓してきた氏の「提案」は、心に残るものであった。

「障がいのある子どものための本作りと普及」

高倉 嗣昌（ふきのとう文庫理事長）

小林静江氏が北海道で発足させ、布の絵本や拡大写本作り、材料セットの販売などの普及に努めてきた先駆的ボランティア団体「ふきのとう文庫」の活動をお話いただいた。

布の絵本は、肌にやさしく、手作りのぬくもりや紙からは感じられない温かみがある。紙の本ではできない、いろいろなことができることも特徴である。アメリカの本から学び「障がいを持つ子どもと本の会」を発足させて研究を重ね、日本での布の絵本の普及に努めてきた。偕成社の協力を得て『手づくり布の絵本』を刊行した。これは鴻池氏の話にあったように儲かる話ではなかっただろうが、この本によって、ふきのとう文庫と布の絵本が周知されたことは大きな意義があった。それ以降も布の絵本を手作りできるように型紙のテキスト化・材料セット販売を順次進めてきた。文庫で作った布の絵本は特殊教育機関や保健医療施設へ貸し出す。それから、公立図書館等への販売もしている。一般販売もしたいが、なかなか大量生産ができず、今の段階では公立図書館からの注文があれば販売している。また、文庫施設（私設図書館）の一角に展示場を設け、来館者に自由に遊んでもらったり、病院小児科病棟のプレイルームに常時数点置いて、入院児にも遊ぶ機会を提供したりしている。さらに公立図書館等の外部の機関・団体が開催する布の絵本講習の講師派遣依頼への対応、布の絵本製作実習、年に一度、展示会を開いて市民に広くPRしている。拡大写本づくりも1982年から手がけている。単に一般図書を拡大するだけではなく、市町村教育委員会等からの拡大テキストづくりの依頼にも対応している。通常では特殊学級にいかなくてはいけない子どもが、普通学級に通うことができるように支援しているが、子ども一人あたり全教科9年間分のテキスト作りは、受けられる人数に限りがある。普及すればするほどボランティアの負担が増すこと、著作権の厳しい時代になったことなど活動への課題は山積している。

ふきのとう文庫のような、地道な全国のボランティアの方たちの努力がどれほど「障害」のある子どもたちの読書の楽しさを支えてきたことだろうか。全国のボランティアの皆さんの活動にあらためて敬意を表したい。

【討論】

四つの報告の後、トロンバッケ氏を交えた質疑・討論を行った。参加者は図書館、出版、養護学校などの関係者や、子どもたちに関わっている現場の方が多く、活発で有意義な質疑が交わされた。その内容は、やさしく読める図書センターの設立経緯と運営費用、マーケティングの方法について、印刷物と電子媒体のメディアミックス出版不振の理由、知的障害児に対して、障害のある人が出てくる本を読むことの是非などであった。トロンバッケ氏からは、日本のさわる絵本や布の絵本等を届けるサービスには感銘を受けたこと、もっと研究を進展させ、お互いに情報交換を行っていききたいとの発言があった。

限られた時間ではあったが盛り沢山な内容であった。あらためてトロンバッケ氏はじめ報告者の方々の貴重なお話に対し、心より感謝を申し上げたい。

IBBY 障害児図書資料センターの前所長であったニナ・ライダーソンは「3分の2の人々のための社会になることを防がなければならない。一つの国の人口の3分の2の人々のための読書環境はますますよくなっていく一方、残りの3分の1の人々の状況はますます悪くなる。」と述べている。日本の状況も私たちが努力しなければならないことは山積している。だが、「世界のバリアフリー絵本展」全国巡回を支えてくれた多くの方々のご尽力や、このシンポジウムも含め「読書の楽しみをすべての子どもたちに」の企画を国際子ども図書館のスタッフの皆様が多くの困難を乗り越えて実現してくださったように、連携できる力をあわせて一步一步進んで行きたい。

最後に、この稿をまとめるにあたって多大なご協力をいただいた金成正子氏(JBBY)に御礼を申し上げる。

(攬上 久子 JBBY 世界のバリアフリー絵本展実行委員会委員長)

※当シンポジウムの詳細については、国際子ども図書館ホームページ

(<http://www.kodomo.go.jp/>) -「展示会・イベント」-「講演会等の記録」を参照ください。

※「読書の楽しみをすべての子どもたちに」についての報告は、『国立国会図書館月報』平成17年11月号 (No.536) を参照ください。



画 坂田恵理子

展示会「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—」

1. はじめに

国際子ども図書館は、約4,500冊のロシア語児童書コレクションの中から、およそ400冊のロシア語原書および翻訳書を選び、ロシア児童文学の世界を紹介する展示会を開催した。ロシア児童文学者の松谷さやか氏に監修をお願いし、ロシア児童文学の流れを概観した展示は国内では先例がなく、画期的な試みとなった。平成17年4月23日から9月18日までの会期中、約42,000人の入場者があった。

また、資料の写真とともに、あらすじ・解説を付して全展示資料を紹介した図録は、ロシア児童文学の流れを概観する資料として大変好評だった。

会期中行った講演会とギャラリートークについては活動報告の40、41ページをご覧ください。

2. 展示会の構成

「ロシアの児童文学」および「ロシアの絵本」の2部構成とし、会場四隅に特別コーナーを設けた。

◆第1部「ロシアの児童文学」

全体を口承文芸の時代から、帝政時代、ソ連時代、ペレストロイカ時代、ソ連崩壊後から現代まで、と歴史の流れに沿って構成し、代表的な作家と作品を紹介した。

ロシアの児童文学は、広大な大地で民衆によって生み出され、長い年月をかけて育まれてきた昔話をはじめとする口承文芸を源流としている。展示では、昔話をもとにしたプーシキンの『金のにわとり』や『金のさかな』、エルショーフの『せむしの小馬』等を紹介した。

19世紀後半、トルストイは貧しい農奴の子どものために領地ヤースナヤ・ポリャーナに学校を作り、教科書『アズブカ』を編纂した。「3びきのくま」や「コーカサスのとりこ」などが載っている教科書とともに学校だった建物の写真もパネルにして掲示した。

ソ連時代は、革命後の1920年代から30年代にかけてゴーリキー、チュコフスキー、マルシャークが指導者となり、新しい児童文学を生み出した。それぞれの代表的な作品『2歳から5歳まで』、『わに』、『森は生きている』等を展示した。

ドイツ軍のソ連侵攻から始まった第二次世界大戦により、作家たちは対ソ戦や戦後の祖国再建に邁進する集団として子どもたちを描いた。ファジェーエフの『若き親衛隊』、ガイダールの『チムール少年隊』、ムサトフの『こぐま星座』等が代表的である。

1953年にスターリンが世を去り独裁政治が終わりを告げると、個人を尊重し、若者の心のひだを描く児童文学が生まれた。フロロフの『愛について』は母親の恋

愛に悩む少年の姿を、ジェレーズニコフの『転校生レンカ』は学校でいじめにあう少女の姿を描いて、ともに内外の児童文学界に衝撃を与えた。

ソ連崩壊後は自由とともに、民営の出版社が数多く現れ商業主義が広がるなか、売れる物を書かなければならない作家たちは書くべきものを模索している状態である。ペレストロイカ後の新分野を開拓した作品としてオスチョールの『きけんな助言』やモスクヴィナーの『ぼくのいぬはジャズが好き』等を展示した。また、ソ連時代の15の共和国で生まれた作品の中からドムパーゼの『母さん心配しないで』（グルジア）、ワンゲリの『野ばと村の長ぐつぼうや』（モルドヴァ共和国）等を展示し、ロシアで紹介された外国作品の最近の例として、ロシア版ハリー・ポッター等も紹介した。

◆第2部「ロシアの絵本」

ロシアの絵本の始まりから時代を追って、個性的で魅力的な画家たちの作品を紹介した。あわせて期間中2回（各1か月間）、安曇野ちひろ美術館からお借りした、ラチョフやマーヴリナ、E.チャルーシン他の原画14点も展示した。

絵本の始まりは、「アーズブカ」や「ブクヴァーリ」と呼ばれる初等読本の挿画や、17世紀以降民衆の間に流布した民衆版画集「ルポーク」に見ることができる。19世紀末にはV.ワスネツォフやポレーノワが、子どもたちの教育のために芸術性の高い絵本を目指した。こうした理想は反リアリズムを主張した“芸術世界”の画家たちに受け継がれて行く。ピリーピンが描く華麗で装飾性豊かなロシアの昔話の世界や、ナルプトのオリエンタリズムを感じさせる絵に、多くの人が見入っていた。

1917年の革命後は、子どもたちに情報を分かりやすく伝えるグラフィカルな絵本が数多く出版された。レーベジェフとマルシャーク、コナシェーヴィチとチュコフスキーのコンビが、芸術性豊かな絵本を次々に生み出し、また、生命力溢れる動物画を描くE.チャルーシンらが活躍した。1920年代から30年代にかけて、ロシア・アヴァンギャルドの画家たちが生み出した斬新な絵本は、欧米や日本の絵本にも影響を与えた。

しかし、スターリン体制のもと、社会主義リアリズムが芸術の表現の基本となると、自由な芸術活動は禁止され、画風を変える画家、亡命する画家も多数現れた。やがて“雪どけ”時代を迎え、絵本の世界にも活気が戻り、国際アンデルセン賞の受賞者マーヴリナ、動物に民族衣装を着せた絵で有名なラチョフのほか、“60年代画家”たちが活躍した。『てぶくろ』等の原画からは、生き生きとした筆使いを感じることが出来る。

しかしながら、ペレストロイカ後は、コミックタッチの絵本が多く出版され、かつての豊かな絵本は姿を消した。このコーナーではロシア絵本の黄金期とも言えるデザイン性溢れる世界に触れてもらうことができたと思う。

平成17年12月に、展示で紹介した60年代画家の一人、マイ・ミトゥーリチ氏が、日本文化をロシアで紹介した長年の功績をたたえられ、旭日小綬賞を受賞したことが伝えられた。

◆特別コーナー

以下の八つの特別コーナーを設けた。

「豊かな口承文芸」

ロシア児童文学の源流である豊かな口承文芸を取りあげ、口承文芸を初めて体系化したアフナーシエフの『ロシア昔話集』を起点に、多民族国家ロシアならではの多彩な昔話・わらべうた等を紹介した。

「ロシアの絵本・きのうときょう」

長い間読み継がれてきて日本で人気の高いロシアの絵本を紹介した。『おおきなかぶ』と『てぶくろ』の前では、大勢の人が立ち止まり見入る姿が見られた。

「ロシア語に翻訳された日本の児童文学」

松谷みよ子の『龍の子太郎』などを展示した。ステレオタイプ化された挿絵から、ロシア人が持つ日本のイメージを窺い知ることが出来る。

「『イワンの馬鹿』と『せむしの小馬』」

日本でロシア児童文学を代表する作品として親しまれている両作品を、合わせて30冊展示した。『イワンの馬鹿』はロシア本国ではあまり知られておらず、作品に対する日口の違いも興味深いものだった。

「ロシアで発行されている児童向け雑誌と教科書」

現在のロシアの子どもたちが手にしている代表的な雑誌数冊と、国語の教科書1冊を展示した。ペレストロイカ後は国家の援助がなくなり、歴史のある雑誌さえ苦しい出版状況にあることも紹介した。

「ロシア語児童文学が紹介された児童雑誌と文学全集」

日本で初めて翻訳されたロシア児童文学は「イワンの馬鹿」で、「大悪魔と小悪魔」という題名で雑誌『少年世界』（明治35年4月）に掲載された。その後ロシア児童文学は雑誌『赤い鳥』等で多数紹介された。終戦後、子ども向け文学全集の中ではロシア児童文学は大きな位置を占めており、当時の日本の子ども達への影響力が窺える。

「日本で発行されている同人雑誌」

ロシア児童文学の翻訳や紹介に熱心な研究者による同人誌4誌を展示した。日本でまだ知られていない作品なども多数紹介されている。

「田中かな子旧蔵資料について」

本展の出典資料の多くは2001年に収集した3,700冊に及ぶ田中かな子旧蔵資料である。田中かな子氏は旅行添乗員としてロシア各地を廻るかたわら、ロシア児童文学やフォークロアの研究・翻訳に携わった。ここでは代表作『せむしのこよう』や

遺稿集『かな子の仕事』等、氏の業績を展示した。

3. アンケートの結果について

本展のアンケートを集計した結果（有効回答数443）は次のとおりである。

- ①性別 男性112名、女性331名
- ②年齢 小1～3年生11名、小4～6年生26名、中学生16名、高校生12名、大学生・大学院生50名、20代79名、30代72名、40代55名、50代53名、60代47名、70代20名、無回答2名（※来場者の年齢層が高い傾向にある）
- ③どこから 都内186名、関東189名 近畿19名、中部13名、北陸9名、北海道5名、東北3名、中国2名、四国1名、九州1名、沖縄2名、海外2名、無回答11名（※通常は都内の方が圧倒的に多いが、今回は関東からの来場者が最も多く、全国的に遠くから足を運んでくださった方が多い）

集計の中で特記すべきことは、本展を知ったきっかけとして、「個人のホームページ（ブログ）（女性/30代）」、「携帯の情報サイト（女性/20代）」など、個人から個人への情報網が増えてきていることである。できるだけ多くの人に来館していただくために、今後はこうした情報網に向けた広報も無視できないものになっていくのではないかと思う。

来館者から、最も多く寄せられた感想は、世代を問わず「昔読んだ本が懐かしかった」というものであった。しかし、あげてもらった具体的な書名は、50代以上は『イワンのばか』、『せむしの小馬』を、20代から30代は『おおきななぶ』、『てぶくろ』をあげている。このことは、ロシアの児童文学の日本での享受のされ方には大きく二段階があることを示している。若い世代からは「ロシアの文豪たちが児童文学に携わっていたことを初めて知った」といった感想も多く、高齢層にとっては懐かしい本が、若年層には新鮮に映ったようである。

次に多く寄せられたのが「ロシアの児童文学の歴史が良くわかった」という感想であった。これまでのロシアの本の展示会は、いずれも特定の作家や時代に限定されており、ロシアの児童文学を国家的イデオロギーの変遷と関連づけながら、通史的に概観する試みは、本展が初めてであった。来館者がこの意図を汲み取ってくれたことは、展示担当者にとって何よりの喜びである。

最後に、来館者からの要望の筆頭は「本を手にとって読みたい」である。3階ミュージアム展示資料のうち1階子どもへのやにも所蔵のある資料については、展示会関連展示コーナーを用意し、子どものへやで手に取って読めるようにしている。次回に向けての課題は「ミュージアムから子どものへやへの導線」を設けることであろうか。

（「ロシア児童文学の世界」展示班）

展示会「ロシア児童文学の世界」に寄せて 「パリーモスクワ」児童文学の交流

末松水海子

2005年4月から5か月間にわたって、国際子ども図書館で開催された展示会「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—」は、たいへん盛況で、これまであまりなじみのないロシアの児童文学を、はじめて広く一般の人々にも知ってもらうとない機会だった。

フランスにおけるロシアの子どもの本の展示会

フランスでは、1997年パリのフォルネー図書館で、10月7日から12月27日まで催された展示会がよく知られている。これは、パリ市立児童図書館「たのしいひととき」の古書資料室主任フランソワーズ・レヴェークの発案・企画によって実現した「ロシア・ソビエト1917—1945年の子どもの本」展である。同時に出版された『ロシアの子どもの本1917—1945年のイラストレーター事典』（*Livres d'enfants russes et soviétiques, 1917—1945*）と同年11月17日に開かれた同じテーマの研究会が記憶に新しい。

1990年代にはほとんど毎年、レヴェークに助けられつつ、この資料室で調べものをしてきた私は、彼女自身の口から何度となくロシア絵本のすばらしさについて聞かされ、展示会の企画にかける熱意がひしひしと伝わってきたものだった。だから、1997年に展示会が実現したときは、彼女のために心からうれしく思った。

レヴェークの話によると、彼女は、1979年パリのポンピドー・センターで開催された「パリーモスクワ」展と1988年ドイツのケルンでの「絵本」展の折に、1917年のロシア革命以降のアヴァンギャルドの著名な画家たちによって描かれたロシア絵本を見出し、その魅力にとりつかれたということだ。図書館に保存されていた、フランス語に訳された何冊かの絵本も探し出し、もっと深くロシアの絵本について知りたいと思うようになった。しかしそれはなかなか困難なことだった。難解な言語とキリル文字の壁はいうまでもないが、そのころフランスでは、ソビエト時代の子どもの本を目にする機会はほとんどなかった。古書店の目録には、せいぜい革命以前にビリーピンが描いた昔話、リッツキーの『2つの正方形（6つの構成による2つの正方形についてのシュプレマティズムのお話）』などが掲載されていただけで、ロシア児童文学については、図書館の目録を探しても、参考文献となるようなものはわずかしかなかった。個人のコレクションを持つ国はいくつかあったようだ



図録『ロシア児童文学の世界』

が、研究はほとんどなされていないような状態だった。したがって「パリーモスクワ」展のときの図録の拠りどころとなったのは、1929年に主として作家ブレーズ・サンドラールが主催した「ソビエトの子どもの本」展の図録、すなわち、現在フランス国立図書館に保存されている図録だけだったといわれている。

1929年4月27日から5月22日までボナパルト書店で開催された展示会では、サンドラール自身が集めた154点の「小さい本」が展示された。それはみな、当時のもっとも権威ある作家・画家によって創られたものばかりだった。展示された本について、サンドラールは次のように紹介している。

「だれもが知っている。ロシアでは、子どもたちだけが革命を利用できる唯一の存在であることを…すべては彼らのものだ。国も町も、汽車も飛行機も、未来も…いまこそロシアの子どもたちに、彼らの美しい絵本を見せてほしい、読むことを教えてほしいと頼むときではないだろうか。この常識を知らないでいる我々西洋の大人たちは…」

さらに1931年には、哲学者ブリス・パラン（後述するナタリー・パランの夫）が「ロシアの子どもの本」と題する新聞記事にこう記している。

「ソビエトからもどってくる世界中の旅行者はみな、子どもの本を持ち帰った。そして、その評判はひろまった。ちょうど日本の浮世絵やゴシック風の彫像やイギリスのトーストが有名になったように。ヨーロッパのいたるところで、それらの本の展示会が催され、紹介記事が書かれるようになる。」

このように、サンドラールやパラン、また「これが天才画家たちの描いた子どもの絵本だ」と、1928年出版された『ロシアの景色と町』という著作のなかで賞賛したアンドレ・ブークレ、子どもの本の創作に意欲を燃やしたシャルル・ヴィルドラックといった作家たちが、1920年代から1930年代にロシアを旅行し、子どもの本についての貴重な証言を残した。

ロシア側からは、マリーナ・ツヴェターエワという詩人の言葉が伝えられている。『新しい子どもの本について』という著書は、こんな文章で締めくくられる。

「いまのような世界になってからはじめて、一つの国が子どもをまじめに扱うようになりました。せいぜい6歳くらいのごく幼い子まで…イギリスでは子どもが道を渡るとき、すべてが停止します。ロシアでは、子どもがすべてを動かすのです。ヨーロッパでは、かつて“子ども陛下”という呼び名がありましたが、ロシアではそれを実行に移しているのです。」

ナタリー・パランとカストール絵本

このツヴェターエワと同じく、ロシアからフランスにやってくる作家や画家は数多くいた。あるものは再び故国へ帰り、またあるものは長く留まって活動した。中でも有名なのがナターリヤ・チェルパーノワ、後のナタリー・パラン(1897-1958)である。

キエフの美術学校で学んだナタリーは、1925年ブリス・パランと出会い、結婚して、その後フランスで暮らすようになった。二度と祖国へは戻れないことになると、夫や友人が旅行のたびに持ってきてくれる子どもの本を見ることによって、できるだけ祖国との絆を保ちたいという願いがふくらんだ。それらの本は、彼女の創作意欲をそそり、大きな影響を与えたという。

そんなとき、夫の紹介でめぐり会ったのがポール・フォーシェというフランス人編集者だった。彼もまた、ロシアの絵本からひらめきを得て、子どものための絵本を作ることを考え始めていた。外見は粗末でも、みずみずしく大胆な絵の描かれたロシアの絵本にすっかり魅了されたフォーシェは、自身の絵本作りにさいし、巢作りに励むカストール（ビーバー）をイメージして、自らを「カストールおじさん」と称した。すぐれた絵と文のリズムや調和、同時に手作業をも重視した彼の絵本シリーズは、以来「カストール絵本」と呼ばれるようになる。

カストール絵本は、表紙と中の紙がほとんど同じ厚紙で、見開きをホッチキスでとめただけの、簡単だがしっかりしたつくりになっており、これまでの伝統的な挿絵ではなく、石版刷りの新鮮な色彩の絵があふれていた。フォーシェは、字をやっと読み始めるころの子どもが一番感受性豊かで、精神的成長の土台が築かれる年齢であると考え、この年齢層を読者対象にして、絵本作りを進めていった。1931年の創刊以来、現在まで続くカストール絵本は、長年多くの人々に親しまれ、フランスの児童文学の歴史に大きな足跡を残した。

このカストール絵本の草創期の画家たちは、ほとんどみなパリに暮らすロシア人だった。1931年の創刊号はナタリー・パラン、1932年エレヌ・ゲルテイック、アレクサンドラ・エクステール、1933年ヒョードル・ロジャンコフスキー、アレクサンドル・チェメートフ、イワン・ビリーピン、1934年ユーリイ・チェルケーソフ、1935年ナタン・アリトマンといった、いずれも絵本史上に輝くそうそうたる顔ぶれである。とりわけナタリー・パランは、初期の7冊目まですべてに絵を描き、傑作を残している。

1932年の『丸と四角』は、丸と四角と三角をさまざまな大きさに切り抜き、それを組み合わせて、物や動物などの形にする工作絵本で、つい最近復刻版が出たパランの代表作の一つである。1999年には、オルリー図書館で、パランの作った140の形の板を展示した「丸と四角」展と、これをもとにしたワークショップが開かれて、話題を呼んだ。だが、なんといってもパランの最大の傑作は、4冊目の『バーバ・ヤガー』であろう。通常の2倍の大きさの版で出版されたこのロシア昔話絵本は、さすがにロシア出身のパランでなければ描けなかっただろうと思わせるすばらしい作品で、カストール絵本の大切な遺産ということが出来る。

1997年の展示会では、1980年代後半からレヴェークがせっせと集めてきた本のほかに、パランの遺族から提供された、彼女のロシア語の蔵書も大いに役立ったが、2004年には、すべてのパラン・コレクションが散逸しないように、資料としてパ

り市立児童図書館「たのしいひととき」に納められた。ちなみに、現在この図書館のロシア児童文学関係の資料を見ると、1917年から1945年までの児童書、児童書とおぼしき蔵書2,000点、ほかに1917年以前と1945年以降にウクライナ、ヘブライなどの言語で書かれたもの、1970年代のリアリズム絵本も含む数多くの再版されたもの、外国語、特にフランス語で再話されたもの、フランスで活躍したロシアの画家たちの全作品を含んだカストール絵本コレクション、原画、写真、ポスター、玩具など、ロシア児童文学全般にわたる研究書（ほとんどがロシア語・英語・ドイツ語）、学術論文、新聞雑誌の記事などとなっている。

フランスに紹介されたロシア児童文学

文学作品については、1970年代に話題作の多くが翻訳紹介された。とくにラ・ファランドール社は、この時代のソビエトの著作が、子どもの目を社会にむけさせることに役立つ力強く新しいものだとして推奨し、紹介する努力を惜しまなかった。ラ・ファランドール社のおかげで、1976年には、ビリービンの絵による昔話『かえるの王女』のような宝物とも呼べる本が出版されたことも特記すべきだろう。ほかにもル・ソルビエ、フラマリオン両出版社が、この時期積極的に翻訳を試みた。たとえばカタージェフの『弧帆は白む』、ヴォロンコワの『町からきた少女』、カヴェーリンの『雪の上の軽やかな歩み』、ピアンキの動物シリーズ、オリガ・ペロフスカヤの小説『愛し合う子どもと動物』などが有名で、今もいくつかの図書館では、読むべき本のリストに載せている。

ロシアの昔話はひじょうに魅力的で、世界中で読まれているが、フランスで翻訳されたものもすばらしい昔話は、偉大なロシア語翻訳者リュダによるものだろう。最近では、語り手のミュリエル・ブロッシュもロシア昔話集を再話している。また幼児に向けて、昔話とも詩ともみなされる短いお話の本が見られるようになった。これは昔話やことわざなどからヒントを得て書かれる伝統的ジャンルで、1920年代の初めに生まれ、マルシャーク、チュコフスキー、マヤコフスキーといった著名な作家たちが発展させたといわれている。

何冊かの絵本や、トルストイ、チューホフなどの古典の再刊と並んで、2005年には、リュドミーラ・ウリツカヤという一般文学の作家が書いた「自伝的」児童書が出版された。原題の『1949年子ども時代』からわかるように、実際の自分の経験と思い出から構築された六つの短編集で、リアリズムと詩情がみごとに溶け合った、甘酸っぱくて、ほろ苦い味わいは、子どもばかりでなく、大人にも感動を与える作品として高く評価されている。

5～8歳くらいの子どもの向き作品では、セルゲイ・コズロフの『ハリネズミくんと森のともだち』がよく知られている。はじめて仏語訳された『おかしな木』以来、同じ作者の本が何冊か訳出されたが、まだ紹介されていない作品が多い。

また数年前から、マリア・セミョーノワの『オオカミ犬』に見られる「スラヴ・

ファンタジー」といわれる新しい流れが、フランスでも人気を博すようになった。今後20歳前のヤング・アダルトたちによく読まれるかどうか、マーケティングの標的として、現在注目を集めている。

ロシアに紹介されたフランス児童文学

ロシアのほうでも、トゥルニエ、ペナック、ムルルヴァなどフランスの著名な作家の児童書が翻訳出版されるようになった。かつてはペローをはじめ、ヴェルヌやユゴーがよく読まれていたというロシアで、現代作家たちの作品が紹介されるようになったことは喜ばしい。研究面での交流も少しずつ活発になっている。ボルドー大学名誉教授ドニズ・エスカルピの「子どもの読書における絵本の役割」という論文が、ロシアの雑誌『カレイドスコープ』に掲載された。一方、エスカルピの主宰する書評誌『読みたい』の155号には、二人のロシアの児童文学研究者が寄稿している。そのうちの一人は、すでにボルドーでのシンポジウムで、ロシアの子どもの本の挿絵について語ったことがあるそうだ。このように、両国の交流は確実に進んでいると思われるが、それはけっして、いま急にはじまったわけではなく、長い歴史にもとづいているのだ。ロシアとフランスの児童文学世界は、いってみれば100年以上前から、強い絆で結ばれてきたといえるだろう。

19世紀のフランス児童文学を考えると、まず思い浮かぶのがジュール・ヴェルヌと並んでセギユール伯爵夫人である。ソフィー・ロストプチンの名でわかるように、彼女はもともとロシアの貴族で、フランスの伯爵と結婚し、ずっとフランスで暮らした。その作品は現在までたいへんよく読まれていて、本ばかりでなく、最近ではテレビドラマ化もされるという、屈指の人気作家である。20世紀になってからは、フランスではカストール絵本を描いた画家たちの活躍がめざましく、いまなお高い評価を得ている。このような作家・画家たちのこれまでの活動を土台に、いま両国の間に、新たな交流がはじまったといえよう。

毎年11月下旬パリで開催される「フランス児童書」展では、世界の国々のうち一か国を選んで、その国のイラストレーターによる原画を展示するコーナーを設けているが、日本、中国に続いて、2005年の招待国はロシアだった。

作品のテーマや人物造形に似た傾向を持つフランスとロシアの児童文学は、互いに関心を深めつつ、今後さらに発展していくことが期待されている。

(すえまつ ひみこ フランス児童文学者)

平成17年度「児童文学連続講座

—当館所蔵資料を使って」を終了して —総合テーマ「日本児童文学の流れ」—

全国の児童サービスに従事する図書館員の専門性の向上と幅広い知識の涵養に資するため、平成17年10月17日から19日までの3日間、国際子ども図書館が広く収集してきた内外の児童書及び、関連書を活用した児童文学連続講座「日本児童文学の流れ」を開催した。講師には、館内職員の他、館外から専門家を招いた。館外から67名（全国19府県および東京近郊から44名、23区から23名）、国立国会図書館東京本館職員を含む館内職員のべ127名が参加した。

<講義内容>

■ 1 日目 (10月17日)

「子どもの文学の新周期—1945-1975」

(神宮輝夫 青山学院大学名誉教授)

日本の児童文学は1948年に一つのピークを迎える。戦後の童話出版界では、今後子どもに何を与えるべきかについての大きな議論があった。その議論が1960年代の熱気ある作品群を生んだ。

「十五年戦争期の絵本—My Choices」

(吉田新一 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

1931年の満州事変から日中戦争を経て、1945年の無条件降伏に至る十五年戦争という困難な時期に、時代の趨勢に流されず、子どもたちへ良書を手渡したいと奮闘した挿絵画家や編集者の存在があった。稀少な絵本の数々を、スライドを用いて紹介した。

「日本児童文学の流れを知るために—日本児童文学史（通史）の紹介」

(千代由利 国際子ども図書館資料情報課長)

各講義のテーマが、日本児童文学史上どこに位置付けられるかを見るために、日本児童文学のジャンル全体を取り上げ、かつ通史として刊行された文献19点を紹介した。

■ 2 日目 (10月18日)

「童話の系譜」

(宮川健郎 明星大学教授)

1950年代、古田足日らを中心に、詩的・象徴的なことばで心象風景を描く「近代童話」を批判する「童話伝統批判」の動きがあり、小川未明は批判された。その後、散文的・説明的なことばで子どもをめぐる状況や社会を描く佐藤さとる、いぬいとみこらの「現代児童文学」が生まれた。

「『タブーの崩壊』とヤングアダルト文学」

(石井直人 白百合女子大学教授)

児童文学ではタブーとされてきた性、自殺、家出、離婚といったテーマが、1970

年代後半から扱われるようになった。その背景として、子ども観や児童文学観の変化、現実の反映などが考えられる。今の時代は、子どもが持つ関心に共鳴して、そこに交流を生むことのできる物語が求められている。

「児童書総合目録活用術」

(渡辺和重 国際子ども図書館資料情報課副主査)

児童書総合目録の概要を説明した後、NDL-OPAC と児童書総合目録を比較しながら、児童書を検索する際のポイントを説明した。



石井講師による講義

■ 3日目 (10月19日)

「4人のジャパネスク・ネオ・ファンタジー女流作家たち—小野不由美を中心に」

(井辻朱美 白百合女子大学教授)

現代日本を代表するファンタジー作家である荻原規子、上橋菜穂子、小野不由美、梨木香歩の作品について解説した。彼女たちの作品の共通点は現実世界と、それに接している異界との交流を描いている点である。

「エンターテインメントの変遷」

(佐藤宗子 千葉大学教授)

かつて「芸術的児童文学」と「大衆的児童文学」という構図においては、エンターテインメントが軽視される傾向にあった。しかし、児童文学の中でエンターテインメントは重要な要素である。『少年倶楽部』の時代から現在に至るまで日本児童文学のエンターテインメントはどのように変化してきたか、多数の作品を紹介しながら解説した。

「国際子ども図書館所蔵ちりめん本について」

(江口磨希 国際子ども図書館資料情報課書誌情報係長)

ちりめん本とは、和紙に挿絵と外国語の文章を印刷し、各方向から圧力を加えちりめん仕立てにし、和綴じにしたものである。明治中期から出版され、内容は日本の昔話が多く、主に外国人への日本土産、美術工芸品として人気を博した。作者の紹介も交えながら、当館が所蔵するちりめん本を紹介した。

今年度の総合テーマ「日本児童文学の流れ」は、日本児童文学史を単なる通史としてではなく、時代と主題、その特質という視点から理解しようとする試みであった。第一線で活躍する充実した外部講師陣を軸に、それぞれのテーマが重層的に重なりあい、体系的に理解することができた。

本年は定員を昨年(35名)の倍近くに設定したが、全国20都道府県から定員数を大幅に超える申込みがあった。受講者アンケートでは、講座の継続とともに連続受講の希望が非常に多かった。

(企画協力課協力係)

国際子ども図書館コレクションから -「ちりめん本」-

江口 磨希

明治中期ごろから外国人の日本土産あるいは美術工芸品として人気を博した、ちりめん本といわれる小型の和綴じ本がある。ちりめん本とは、日本の昔話や文学、日本の様子などが外国語で描かれた挿絵入りの本である。英語をはじめフランス語、ドイツ語、スペイン語等さまざまな言語で発行された。絵や文を木版等で印刷した後、各方向から縮めてちりめん状に加工した和紙を使用しているのが特徴で、手触りがとても柔らかい。



国際子ども図書館ではちりめん本を58冊（英語34冊、スペイン語20冊、フランス語3冊、ドイツ語1冊）所蔵しているが、そのほとんどが日本昔噺シリーズである。これらは弘文社によって明治18年（1885年）から出版が始まり、ちりめん本といえばまず挙げられるほどよく知られるシリーズとなった。英語版は全25冊。おなじみの桃太郎、舌切り雀、かちかち山などの昔話が収録されている。日本児童文学の草分けと言われる巖谷小波が出版した『日本昔噺』24編（1894～1896年）はその後の昔話絵本等に大きな影響を与えたが、この作品は弘文社の日本昔噺シリーズに影響を受けたと言われている。実際に小波の24編のうちほとんどが、日本昔噺シリーズ20冊と内容が重なっている。

弘文社は、長谷川武次郎が経営していた出版社で、ちりめん本を数多く出版した。作りが丁寧で、著者や訳者などに、ラフカディオ・ハーンやチェンバレンといった当時著名だった人々を採用している。長谷川武次郎は若い頃に外国人宣教師から英語を学んでおり、そうした関係でこれらの人々と知り合ったようだ。また、長谷川武次郎は日本国内だけではなく、海外の出版社と提携して海外でもちりめん本を販売していた。

なお東京本館でも、国際子ども図書館とは別に180冊ほどちりめん本を所蔵している。

（えぐち まき 資料情報課書誌情報係長）

国際子ども図書館ホームページのリニューアル

(<http://www.kodomo.go.jp/>)

国際子ども図書館は、平成17年5月18日にホームページをリニューアルしました。従来のホームページより、見やすく、さらに情報も増えました。

新デザインで重視されたものは、「使いやすく、わかりやすい。統一感のあるもの」という点です。大きな変更点としては、サービス内容ごとにシンボルカラーを変更し、さらに各ページ上部に現在の階層表示を設けました。これにより自分が今どここのページにいるのか、どのくらいの階層にいるのかが一目で分かるようになりました。

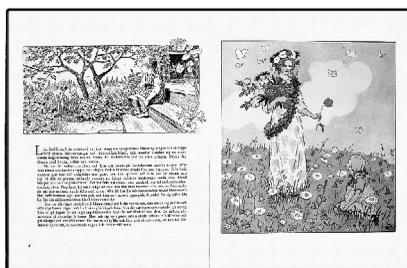
新しいコンテンツとしては、以下の二つが加わり、更にホームページの内容を充実させています。

☆「外国語に翻訳刊行された日本の児童書」のデータベース化

以前から作成、公開してきました「外国語に翻訳刊行された日本の児童書」をデータベース化し、海外においてさまざまな言語に翻訳刊行された日本の児童書の出版情報が検索できるようになりました。今までは五十音順での提供でしたが、データベース化により、タイトルなどにある単語からも探すことが出来るようになり、皆様により活用していただけるようになりました。

☆絵本ギャラリー「ユージェントシュティルと絵本画家たち」の追加

絵本ギャラリーに「ユージェントシュティルと絵本画家たち」を追加しました。19世紀末から20世紀初めにかけて、欧米諸国で出版された8か国11冊の絵本の原書を、朗読や内容にあわせた音楽とともにご覧になれます。



「ユージェントシュティルと絵本画家たち」画面

利用される皆様にとって使いやすく、わかりやすいデザインをめざし、今後も魅力的なコンテンツを増やしてまいります。これからも国際子ども図書館ホームページをよろしく願いいたします。

(企画協力課企画広報係)

児童書デジタルライブラリーと 児童書総合目録の公開資料拡大

国際子ども図書館は、設立準備段階から電子図書館サービスを主な機能の一つと位置付けてきました。現在では、児童書に関する様々な電子情報の提供システムやプログラムを構築し、ホームページ（HP）上で提供しています。平成17年度には以下の二つの電子情報提供サービスの拡大を行いました。

児童書デジタルライブラリーの公開資料の拡大

「児童書デジタルライブラリー」は当館で所蔵している昭和30年以前の日本の児童書の一部を電子化した全文画像データベースです。平成15年4月から国際子ども図書館のHP（<http://www.kodomo.go.jp/resource/search/index.html>）で公開していますので、既にご利用になられている方も多いのではないのでしょうか。

平成15年度にインターネット公開したのは、既に著作権が消滅したことが確認された322件の図書でした。その他に著作権者の許可をいただいて館内のみで提供している資料が約1,500件あります。これらの資料のインターネット提供を目指して、平成16年度に著作権者の方々に対し、インターネットによる提供許可の依頼を行いました。その結果、許可をいただいた875件を平成17年7月から公開しました。今回の追加公開により、児童書デジタルライブラリーの公開総点数は1,197タイトル、42,240画像となりました。

画像をご覧になるには、「児童書デジタルライブラリー」のトップページから検索画面に進み、タイトルと著者の五十音リストかキーワードから掲載資料を検索することができます。一部の資料は目次からも検索可能です。

今回の公開資料は昭和前期から戦後すぐにかけて刊行された図書がほとんどで、川崎大治『太陽をかこむ子供たち』（文昭社 昭和15年）、新美南吉『おちいさんのランプ』（有光社 昭和17年）、壺井栄『夕顔の言葉』（紀元社 昭和19年）、井伏鱒二『シビレ池のかも』（小山書店 昭和23年）などが含まれています。



児童書デジタルライブラリー
『シビレ池のかも』表紙

児童書総合目録における書誌データの追加公開

児童書総合目録は、国際子ども図書館、国立国会図書館のほか、国内で児童書を所蔵する主要類縁機関である大阪国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、東京都立多摩図書館、日本近代文学館、梅花女子大学図書館の6機関が所蔵する児童書及び関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる目録です。

平成17年9月に、児童書総合目録の参加館として白百合女子大学図書館が新たに加入しました。平成18年3月には同図書館と同大学児童文化研究センターの所蔵する児童書及び関連書の書誌データ4,621件が検索できるようになります。提供された書誌には、同図書館所蔵のフレーザー文庫（米国ファーレイ・ディキンソン大学図書館長だったジェイムズ・フレーザー教授の児童文化に関するコレクション）、児童文化研究センター所蔵の光吉文庫（英米児童文学研究者・翻訳家の故光吉夏弥氏旧蔵書）、富田文庫（白百合女子大学児童文化学科教授だった故富田博之氏旧蔵書）などが含まれています。

また大阪国際児童文学館からは既に提供を受けていた戦前の図書と雑誌に加えて、戦後の児童図書の書誌データ約216,000件と雑誌の所蔵巻号情報を提供していただき、追加公開しました。

この他、東京都立多摩図書館が平成16～17年に収集した児童書の書誌データも追加公開しました。今後も同館に新規収蔵された児童書のデータは定期的に追加していく予定です。

以上の類縁機関のデータと国際子ども図書館が週次に追加しているデータを合わせ、平成17年末現在の児童書総合目録の書誌データ提供件数は、図書約647,744件、逐次刊行物約14,440件になりました。

児童書総合目録はこうした書誌・所在情報のみならず、あらすじ・解題、受賞情報などを付加して、専門情報データベースとしての充実を図っています。ご活用いただければ幸いです。

(資料情報課)

■ 検索項目
タイトル: _____
著者名: _____
出版者: _____
件名: _____
あらすじ: _____

■ 検索オプション
資料の種類: 和図書 洋図書 逐次刊行物/雑誌記事索引
一覧の表示種:
一覧の表示件数:

● 検索したい項目に検索語を入力して「検索開始」ボタンをクリックしてください。
検索語はひらがな、カタカナ、漢字、半角記号を使用できます。

● 1項目内で複数検索語を入力する場合はスペースで区切ってください。
その場合、AND条件での検索となります。 > 複数語での検索

入力例
「親し△本」
→ 「親しり」と「本」で検索します(△は空白スペース)
「夏目漱石」
→ 「夏目漱石」の著作を検索する場合

2005年2月に1か月間、在外研究員としてマレーシア、タイ、インドを訪問し、各国立図書館等の児童サービスを見学すると共に、児童書の出版事情を調べてきました。ここでは国立図書館の児童サービスを中心にご報告します。

I マレーシア

マレーシア国立図書館の子ども図書館(写真)は12歳以下を対象とし、約2万冊の児童書を開架しています。3冊3週間までの館外貸出しも行っています。子ども図書館の閲覧スペースに隣接した子どもハイパーメディアセンターは、パソコンなどを配置し、五つのエリアに分かれています。その内の



一つの芸術エリアではパソコン上で絵を描いたり、コンパクトディスクを使って物語を創作したりできるので人気があります。同じ階の子ども劇場では、ストーリーテリング、工作、絵画、情報探などの催物が行われます。催物が行われるのは土曜日の午前中ですが、学校の長期休み期間には火・木曜日も開催しています。催物は子どもと本を近づけるよう全て本に基づいています。(http://www.pnm.my)

II タイ

バンコクにある国立図書館を訪問しました。子ども図書館は以前国立図書館内にありましたが、現在は場所の都合で資料とも分館に移動しており、児童サービスは見学できませんでした。しかし、国立図書館で行われている読書推進活動についてお話を聞くことができました。毎年読書推進のための催物として、ゲーム、映画、劇、様々なテーマについての講演などが行われています。(http://www.nlt.go.th)

首相府の内部組織に属する Thai Knowledge Park (TK Park) を見学しました。TK Park は、知識重視の社会をめざすタイで、若者が読書習慣を養い、知識に触れる多様なプログラムと設備の提供を目的として作られた図書館です。バンコクのセントラルワールドプラザ6階に位置し、2005年1月に開館して3週間で1日2,000人が訪れる盛況ぶりでした。主たる対象は13~25歳ですが、誰でも入ることができます。約1,000平方メートルの広さがあり、閲覧スペースとメディアテーク、オープンスクエア(多目的に使用)、ミニシアターとヴァーチャルリアリティコーナーに分かれています。子ども向けのストーリーテリング、ワークショップ、

展示のほか様々な催物が行われています。(http://www.tkpark.or.th)

Ⅲ インド

コルカタにある国立図書館の児童室を訪問しました。児童室は、1960年にコルカタ初の子どものための読書センターとして開館しました。対象年齢は6～14歳。蔵書数は約2万冊で、中心は英語資料ですが、納本で収集されるインド諸言語資料、交換により収集したロシア語・フランス語資料も所蔵しています。外国出版物はレファレンス資料を中心に選んで購入しています。入口左手の魚の水槽が目印で、右手が閲覧スペース。その奥に蔵書が開架されており、壁には自由に使える黒板がありました。貸出しはしておらず、子ども向けの催物も特にやっていませんでした。学校の宿題のため子どもたちがくることがあるそうですが、一日に20人前後と利用はそれほど多くないようでした。(http://www.nlindia.org)

Ⅳ まとめ

マレーシア国立図書館では子どもの読書推進に熱心に取組んでおり、特に7月は全国読書月間で、活発な活動が行われます。公共図書館も見学しましたが、パソコンコーナーを設けているところが多く、パソコンを利用した読書や学習が盛んという印象を受けました。マレーシアは教育熱心で、児童書の出版では教科書と試験のための復習教材が依然として大きな市場です。英語で書かれた出版物を多く輸入しており、児童書出版はそれほど盛んではありません。小中学校の算数・理科を英語で教える政策も進められています。

タイの国立図書館では読書推進のための催物は行っていますが、児童書を置かずに、レファレンス資料・一般書の収集に重点を置いており、大人が対象です。TK Park は子どもの読書推進をめざす新しい試みといえます。また、タイの国際児童図書評議会 (IBBY) 支部では読書推進のため、ブックスタートに取組んでいます。タイの児童書市場では、英米や日本など外国の翻訳書が多く、ハリー・ポッターシリーズは40万部以上売れました。

インドの国立図書館は読書推進を目的としていますが、児童サービスは活発とは言えません。むしろインドの IBBY 支部 AWIC が全国で文庫活動を組織展開しています。児童書の出版では、古典文学の再話が多いようです。インドにはヒンディー語、英語以外に主要言語が17ありますが、英語の出版物が充実しており、地方ではその地域の言語での出版が盛んです。デリーでは、『ナンダン』や『チャンパック』などの児童雑誌が子どもたちによく知られていると聞きました。

今回調査した出版事情を国際子ども図書館の資料収集に生かし、蔵書を充実させていきたいと思えます。

(ますだりえ 資料情報課書誌情報係)

福岡から上野に来て

福岡県立図書館から国際子ども図書館に来て、あっという間に2年が過ぎようとしています。私は、4年間高校の学校図書館で働き、その後福岡県立図書館で6年間児童サービスに携わりました。今は、国立国会図書館の中で働くという本当にいい経験をさせていただいています。この経験の中から、自分なりにいくつかを振り返りたいと思います。

まず、カウンターでの仕事が違いました。福岡では貸出し等に追われて、なかなかできなかったフロアワークが、ここではたっぷりできます。子どもたちに何を探しているか声をかけるだけでなく、絵本の読み聞かせもできました。おはなし会でも、福岡では月一回だったストーリーテリングが毎週になりました。ろうそくはつけず、明るい部屋でのおはなし会です。参加する子どもたちはほとんど初来館です。そこで、定番絵本の読み聞かせをたっぷりすることもできました。食い入るように聞く子どもたちの姿を見て、お話のよさと、読み継がれてきた絵本の力を改めて感じました。

子どもの見学に際し、毎年来館するインターナショナルスクールや、養護学校の子どもたちに、おはなし会をすることもできました。経験のなかったことなので、プログラムの組み方など、いろいろ勉強になりました。インターナショナルスクールの子どもたちも、養護学校の子どもたちも、笑顔でとても楽しんでくれました。

また、たくさんの研修に参加しました。わらべうたの職員研修では、乳幼児向けのおはなし会で使えるわらべうたをたくさん教えていただきました。地方ではなかなか聴くことの出来ない講師の先生方のお話をうかがうこともできました。

児童サービスの基本になる資料を読みあう自主研修会も、よい経験になりました。子どもに本を手渡すために大事なことは、資料を知り、子どもを知り、そのための方法を知ることです。膨大な資料の中から何を手渡し、どう手渡すかを皆さんと語り合ったことは、私の宝ものです。

地方の図書館にとって、国立国会図書館は、頼りになる「図書館の図書館」です。国際子ども図書館は、唯一の国立の児童書専門図書館として、大きな期待をされています。国としては、モデル的にしかできないサービスもありますが、それは公共図書館が実践していくこととして、国際子ども図書館には、児童サービスを行う図書館の灯台のような存在でいてほしいと思っています。私もこの経験を生かして、4月からまた福岡県立図書館で新たな気持ちで仕事をしていきたいと思います。

(児童サービス課 坂梨 秀子)

活動報告

(平成17年1月～12月)

1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本のもつ魅力を伝えるとともに、子どもと本の出会いの場を提供することを目的として、国際子ども図書館所蔵児童書を中心に、子どもの本・文化に関する展示会を「本のミュージアム」で行っている。平成17年は、4回の展示会を開催した。

○「本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに—

[平成16年9月18日(土)～平成17年4月10日(日)]

計157日：入場者数35,810人

昔話や児童文学に数多く登場し、人間との関わり方によってさまざまにえがかれる「動物」をテーマとした。平成13年に開催し好評であった「本にえがかれた動物展」と視点を変え、日本やアジアの国々で親しまれている「十二支」の動物が登場する資料を計238冊展示した。

子どもに親しまれている「動物」というテーマであったことに加えて、絵巻やイソップ関係の古書により、資料の奥の深さを紹介できたこと、また年末年始にかけては干支に関心が集まったことなどから、子どもから大人まで幅広い年齢層の観覧者から高い評価を得た。

また、本展示会は、会期が約7か月という国際子ども図書館の展示会の中でも最も長期にわたる開催となった。



○「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—

[平成17年4月23日(土)～9月18日(日) 計121日：入場者数41,615人]

国際子ども図書館が所蔵する約4,500冊のロシア語児童書を広く紹介することを目的に、昔話の時代から、帝政時代、1917年の革命後のソ連時代、ソ連邦崩壊後から現代までと歴史を追いながら各時代の代表的な作家と作品を日本語翻訳書とともに紹介し、ロシア児童文学の全体像を概観した。また、帝政末期に華麗な昔話の世界を描き出したピリーピン、革命後マルシャークとのコンビで、「絵本の革命」のリーダーとして活躍したレーベジェフ、動物画のE.チャルーシン、『てぶくろ』でおなじみのラチョフ、国際アンデルセン受賞者マープリナ等個性豊かな画家たちの絵本を、安曇野ちひろ美術館から借用した原画14点とともに展示した。また特別コーナーとして、「ロシアの絵本・きのうときょう」、「ロシア語に翻訳された日本の児童文学」、「ロシア児童文学が紹介された児童雑誌と文学全集」等を設け、計389冊の資料を展示した。

5か月弱の会期中に42,000人近い入場者が訪れ、子どもから高齢者に至るまで幅広い年齢層から高い評価を得るとともに、雑誌や新聞等多数のメディアにも取り上げられた。また、9月8日には皇后陛下の行啓があり、展示会を観覧された。

○「読書の楽しみをすべての子どもたちに」

(社団法人日本国際児童図書評議会 (JBBY) との共催)

すべての子どもたちが読書の楽しみに巡りあうための課題とその解決法を図書館と出版の協働のなかで考える催物として、シンポジウムと二つの展示で構成した。

①シンポジウム「バリアフリー図書の普及を願ってー図書館と出版の協働」

[平成17年7月20日(水)：参加者103人]

(3ページ以降を参照)

②展示A「世界のバリアフリー絵本展」

[平成17年7月21日(木)～7月24日(日) 計4日：入場者数868人]

日本国際児童図書評議会が国際児童図書評議会 (IBBY) から借用し、43箇所を巡回展示を行ってきた「世界のバリアフリー絵本展」43点の国内最終展示を行った。

③展示B「日本のバリアフリー図書の歩み」

[平成17年7月21日(木)～9月4日(日)

計39日：入場者数9,647人]

日本における障害のある子のための資料の歩みを振り返り、その中で歴史的意味を持つ点字資料、拡大写本、布の絵本、電子資料など45点の資料を展示した。



世界のバリアフリー絵本展

○「ゆめいろのパレットⅡー野間国際絵本原画コンクール入賞作品アジア・アフリカ・ラテンアメリカからー」

[平成17年10月1日(土)～平成18年1月15日(日) 計79日：入場者数22,423人]

(財団法人ユネスコ・アジア文化センターとの共催)

平成15年度に続き、アジア・太平洋地域の文化振興を推進している財団法人ユネスコ・アジア文化センターが、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの絵本画家の創作活動を奨励するために隔年で開催している野間国際絵本原画コンクールの第14回の入賞作品33点を公開するとともに、国際子ども図書館が所蔵する同地域の絵本や過去の受賞者の作品を中心とした絵本約150冊の展示を行った。また、9月30日、関係者を招いて、開会式及びテープカットを行った。

アジア、アフリカ、ラテンアメリカには豊か



な口承伝統が存在している。絵本の原画という芸術作品、そして様々な絵本を通して、こうした地域の魅力あふれる物語の世界、多様な表現の方法について紹介した。

○展示会資料貸出し

国際子ども図書館で行った展示会「本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに—」出典資料のうち図書13冊等を、鳥取県で開催された第17回全国生涯学習フェスティバル展示会に貸し出した（平成17年10月9日(日)～10月15日(土) まなびピア鳥取2005）。

○常設展示「20世紀の絵本—同じ年の絵本をさがそう—」

毎年新しい作品が生まれ、親から子へと読みつがれてきた絵本。20世紀に生まれ、今なお子どもたちに愛され続けている絵本に触れる機会を提供するために、3階ホール常設展示コーナーを2年ぶりにリニューアルした。

国際子ども図書館が所蔵する資料から20世紀（原書初版年が1901年から2000年まで）に刊行された絵本を年代順に紹介している。展示リストでは年ごとに代表作を数点ずつ紹介し、1階子どものへやで手にとって読むことができるようにした。『ひとまねござるときいろいぼうし』が1941年生まれ、『ぐりとぐら』が1963年生まれなど、自分や家族の生まれた年に誕生した絵本や、子どもの頃に読んだ本を親子三代で読み比べることもできる企画である。また、展示に関連したクイズも実施して、展示資料の内容を深く知ることができるよう工夫している。

2. イベント

国際子ども図書館では、各展示会開催中、展示内容への理解をより深めるため、展示会に関連した講演会やギャラリートーク等の様々な催物を開催している。

○講演会「十二支と日本人」

[平成17年1月22日(土)：参加者53名]

「本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに—」の関連行事として、東洋大学名誉教授で日本民俗学会理事の大島建彦氏による講演会を開催した。内容は、中国では紀元2世紀の漢の時代から「十干」と「十二支」を組み合わせて年・月・日・時刻や方位を表すことが行われるようになり、日本では中国の暦法をそのまま取り入れていること等についての紹介、十二支の動物を「この国土にすまない動物」（羊、虎、龍）、「山にすんで人と隣りあう動物」（兎、猿、猪）、「山と里の間で人とかわりあう動物」（鼠、蛇）、「里にあって人に飼われる動物」（牛、馬、鶏、犬）の四つに類別し、それぞれの動物にまつわる民俗・風習について、文献や昔話を引用した解説等であった。

○「子ども読書の日」行事「子どもといっしょに絵本の世界へ」

[平成17年4月23日(土)：参加者89名]

「子ども読書の日」(4月23日)の行事として、青山学院女子短期大学・立教女学院短期大学非常勤講師の中村 証子氏による講演会を開催した。講演は、長年にわたる保育・幼児教育での現場経験に基づくもので、年齢・発達段階においてそれぞれに異なる子どもと読書の関係、読み聞かせの意義、お話や絵本が持つ楽しさと体験の重要性、子どもたちが想像力を育むことによって人生を豊かなものとするために大人が果たすべき役割がテーマであった。

土曜日であり、また、「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—」展の初日でもあったため、親子連れを含めて、多くの聴衆の参加があった。

○講演会「ロシア児童文学の思い出」

[平成17年5月28日(土)：参加者103名]

「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—」展の関連行事として、詩人で小説家・童話作家である三木卓氏の講演会を開催した。子どもの頃に親しんだトルストイの童話や、バイコフの『偉大なる王』、イリインの『灯火の歴史』などの読書体験にはじまり、広大な自然を背景に、ビアンキからストラコフに受け継がれている自然と動物描写に優れたロシア児童文学の特質についての紹介があった。また、日本で親しまれている『おおきななかぶ』、『3びきのくま』、『てぶくろ』などの昔話を例に、絵本の楽しさについて考察をめぐらし、日本のロシア児童文学に携わる人々の系譜と密度の濃いつながりについても触れられた。

講演後、ロシアの児童文学が日本で親しまれている理由や、現在の子どもたちに推薦すべき動物物語などについての質疑応答があった。

○講演会「ロシアの絵本を日本の子どもに」

[平成17年9月3日(土)：参加者83名]

「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—」展の関連行事として、福音館書店相談役である松居直氏の講演会を開催した。

終戦後の古本屋で発見した『トルストイ全集』に感銘を受けたロシア文学との出会い、いぬいとみこに薦められたチュコフスキーの『2歳から5歳まで』によりロシア児童文学への理解を深めたこと、福音館の編集者として月刊物語絵本『こどものとも』を創刊、動物文学者ビアンキの『きつねとねずみ』、『くちばしくらべ』、昔話『大きななかぶ』、『てぶくろ』などのロシアの絵本を世に送り出したこと等の回想が語られた。

ことばが絵を生かし、絵がことばを支える絵本の魅力について、内田莉莎子の日本語の繊細な感性によるすぐれた訳業、動物画家藪内正幸の発掘、彫刻家佐藤忠良の絵本への起用について言及しつつ、解説を行った。更に、動物画家ラチョフや国際アンデルセン賞受賞者マーブリナの絵の味わい方を述べ、原画保存の大切さなど、

編集者としての長年の経験に裏付けられた児童書への思いを語られた。

○ギャラリー・トーク

5月14日、5月21日、5月28日、7月30日、8月6日、8月27日の各土曜日、午後1時30分より約1時間、本展示会監修者の松谷さやか氏によるギャラリー・トークを開催した。各回、40名から90名、子どもから大人まで、幅広い年齢層の参加があった。エピソード等も交えた丁寧な解説に、参加者は熱心に聞き入っていた。またアンケートによると、展示をより深く理解できたとの意見が多く、大変好評であった。

○「児童文学連続講座—当館所蔵資料を使って」

〔平成17年10月17日(月)～19日(水)：館外67名、館内からのべ127名〕

総合テーマを「日本児童文学の流れ」として、全国の公共図書館等において児童サービスを担当する職員および国際子ども図書館、国立国会図書館東京本館職員を対象に児童文学連続講座を開催した（本文28、29ページを参照）。

○第7回図書館総合展

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場としての図書館総合展が11月30日(水)から12月2日(金)まで、横浜市のパシフィコ横浜展示ホールで開催された。国際子ども図書館は6回目の出展となるが本年も東京本館とともに参加した。出展内容はプランゲ文庫図書収集事業と電子図書館事業の紹介を中心とした。限られたスペースで効果的な広報を行うために、パネル展示、パンフレットの配布、案内ビデオの上映、HPのデモンストレーション等を行った。展示ブースへの来場者数は昨年より多く、約1,200人であった。

3. 児童サービス

○「子どものへや」「世界を知るへや」の小展示

昨年に引き続き以下の小展示を実施した。表紙が見えるように本を展示したことにより、多くの子どもが興味を持ち、手にとって楽しんでいた。

<子どものへや>

「おやすみなさいの本」

(平成16年12月～平成17年2月)

「今年は酉年にわたりの本」(1月～2月)

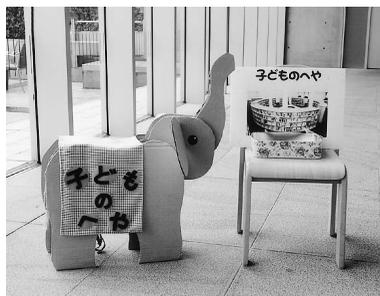
「たのしいがっこうようちえん」

(3月～4月)

「はるのほん」(3月～4月)

「おとうさんおかあさん」(5月～6月)

「あめの本」(6月～7月)



- 「なつの本」(7月～8月)
- 「むし・むし・むし」(7月～8月)
- 「あきのむし・むし・むし」(9月)
- 「みのりのあき」(9月～11月)
- 「おいしいおかしの本」(10月～11月)
- 「白銀の世界－ゆきのほん－」(12月～)
- 「時のふしぎ－時間と時計の本－」(12月～)

<世界を知るへや>

- 「本にえがかれた動物展Ⅱ関連展示」(平成16年9月～平成17年4月)
- 「世界の冬のおまつり」(平成16年12月～平成17年1月)
- 「しまの本」(4月～6月)
- 「ロシア児童文学の世界展開連展示」(4月～9月)
- 「バリアフリー絵本展開連展示」(7月～9月)
- 「いろんなたてもいろいろくらし」
(7月～10月)
- 「世界の昔話」(10月～11月)
- 「ゆめいろのパレットⅡ展開連展示」
(10月～)
- 「世界のおはなし 冬のまき」(12月～)
- 「かずの本」「ABCの本」(通年展示)



今年子どもたちに本の魅力を伝えるための試みとして、「夏休み読書キャンペーン2005」を行った。絵本、物語、科学の本など職員が選んだ本を室内に配し、本を読むことで答えることの出来る三択問題とそれらの本の配置図を書いたカードを配布した。本を探し出して読み、問題に答え、スタンプを集めるこの企画に、300名以上の子どもたちが参加した。小さい子どもたちや、やり方のよくわからない子どもたちには、職員と一緒に本を読んだり説明したりしたため、フロアワークの機会が格段に増えたことは収穫であった。

また、廊下に面した小窓に、本とともに季節や行事にあわせて手作りした折り紙や人形などを飾り、子どもが親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。

○子どものための催物

<子どものためのおはなし会>

職員によるおはなし会を、毎週土曜日・日曜日の午後2時から(4歳から小学1年生対象)と午後3時から(小学2年生以上対象)実施した。平成17年は合計191回実施し、のべ1,163名が参加した。

おはなし会では主にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行っている。春休みやこどもの日には、4歳以上の子どもを対象として、普段のおはなし会の内容を

拡大し、大型絵本の読み聞かせ、パネルシアター、人形劇等を実施した。また、7月末より、参加するたびにスタンプを押していく「おはなし会カード」を作成し、子どもたちの参加の状況を調べた。初めて会に参加する子どもが多い中、何度も参加して楽しんでいる子やほぼ毎週のように聞きにくる子もいることがわかった。

<ちいさな子どものための絵本の時間>

昨年に引き続き、3歳以下の子どもと保護者を対象として、月に2回開催した。平成17年は合計23回実施し、のべ71組143名が参加した。絵本とわらべうたを組み合わせながら、参加者の年齢や個性に合わせたプログラムを工夫している。日頃、わらべうたに親しむ機会の少ない参加者も、同じ遊びを繰り返すうちにすっかり覚え、素朴なメロディーや遊びを存分に楽しんでた。

<科学あそび「見えないものを見てみようーゴム風船を使った空気の実験ー」>

8月6日(土)・7日(日)、各日2回ホールにて実施した。講師は職員が担当した。参加対象者は小学2年生以上とした。両日合わせて39名の参加があった。

各回とも2～3グループに分かれ、『ゴム風船の実験』(さ・え・ら書房)、『ふうせんの科学』(星の環会)などに紹介されている実験を行った。異なる年齢の子どもたち同士が協力しあいながら取り組んでおり、職員からの問いかけにも積極的に答えていた。

○子どもの見学

1月から12月までに、要望に応じ37件1,038名の見学を実施した。見学団体は、保育園や幼稚園から小・中学校、養護学校、インターナショナルスクールおよび日本語学級と多様である。全面開館から4年目となるが、毎年訪れる団体や1年間に複数回来館する団体があるなど、見学による利用が定着しつつあることがわかる。

内容は、館内見学(子ども向け当館ビデオの視聴を含む)、おはなし会、調べ学習の援助などを希望により組み合わせ対応している。今年は高校生による児童図書館員の仕事に関するインタビューにも数回対応した。また、事前の申請がなく、学級・学年単位など大人数で訪れる場合にも、適切な対応を心がけた(統計には含まない)。

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する資料とその国の絵本や物語および原語の絵本などを、40冊から60冊のセットにして、学校図書館に1か月間貸し出すサービスである。平成17年1月から12月までに、のべ199校に計9,977冊の資料を貸し出した。今年度から、広く学校図書館や公共図書館で活用していただけるよう各セットのリストおよび資料の解題をホームページに掲載した。10月に開催された第91回全国図書館大会では、第3分科会「学校図書館」の第3分科会に

において、学校図書館セット貸出し事業開始の経緯、サービスの概要、および今後の予定について報告した。平成18年1月からは新たに「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」を加え、全部で5種類のセットとなった。

4. その他

○第3回国際子ども図書館連絡会議

[平成17年6月15日(水)]

当館と協力関係にある機関に昨年度の活動と今後の計画について報告するとともに、当館のサービスについての意見を伺うため、連絡会議を開催した。平成17年の参加機関は、大阪府立国際児童文学館、国際交流基金、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立オリンピック記念青少年総合センター、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、同省初等中等教育局児童生徒課、同省スポーツ・青少年局青少年課の15機関であった（ユネスコ・アジア文化センターは欠席）。

○ブランゲ文庫児童書収集事業の開始

ブランゲ文庫は、米国メリーランド大学マッケルディン図書館が所蔵する、連合国による占領期の検閲制度が実施された間（1945-1949年）に我が国で出版された図書、雑誌、新聞・通信の包括的なコレクションである。当館はこれまでメリーランド大学との共同事業においてブランゲ文庫の雑誌、新聞資料をマイクロ化し収集してきたが、このたび約70,000タイトルを数える図書マイクロ化による収集を計画し、平成17年5月2日メリーランド大学においてブランゲ文庫図書マイクロ化共同事業に係る了解覚書の調印を行い事業の正式な契約を締結した。

図書事業のうち第一段階では児童書約8,000タイトルのカラーマイクロ化を計画しており、平成18年2月から約4か年をかけ実施する予定となっている。マイクロ化されたブランゲ文庫児童書コレクションは、国際子ども図書館で順次利用提供を予定している。

5. 刊行物

- ・パンフレット：『国際子ども図書館』
- ・『国際子ども図書館の窓』
- ・『国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申』
- ・図録『ロシア児童文学の世界－昔話から現代の作品まで－』
- ・パンフレット：『学校図書館へのサービスのご案内』
- ・『平成16年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「ファンタジーの誕生と発展』』
- ・利用案内：一般向け、子ども向け。各日本語、英語、ハンガル、中国語版

数字で見る！

国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計（平成17年12月31日現在）

資料室	図書	日本語	児童書(*1)	177,597	
			学校教科書	1,689	
			教師用指導書	2,630	
			児童書関連書	13,066	
			小計	194,982	
		外国語	児童書(*1)	欧米言語	32,753
				アジア言語	13,254
			児童書関連書	2,059	
			小計	48,066	
		計	243,048		
	逐次刊行物 (単位:タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	975
				関連雑誌	736
			外国語	欧米言語	99
				アジア言語	36
		小計	1,846		
		新聞	日本語	15	
			外国語	1	
	小計		16		
	非図書資料(*2) (単位:点)	静止画・紙芝居	824		
		カード・カルタ	139		
マイクロフィルム		52			
マイクロフィッシュ		31,436			
音楽資料(レコード、CD、カセットテープ)(*3)		615			
映像資料(ビデオテープ・ディスク)		2,334			
電子資料(光ディスク、磁気ディスク)		214			
子どものへや 世界を知るへや	図書	日本語	13,474		
		外国語	767		
		小計	14,241		
	逐次刊行物(単位:タイトル)	22			
メディアふれあいコーナー	電子資料	148			

*1 学習参考書、楽譜、組み合わせ資料を含む。

*2 教師用指導書・児童書関連書のうち非図書形態のもの数を含む。

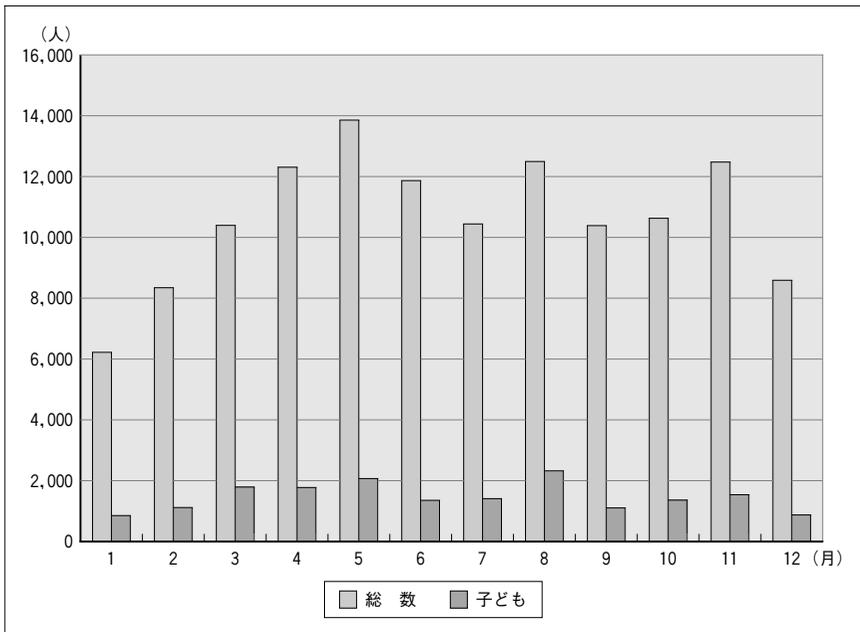
*3 教師用指導書のみ（児童用音楽資料は未所蔵）

(2) 国際子ども図書館利用統計（平成17年1月5日～12月27日）

1)-a 来館者統計・平成12年5月6日～平成17年12月27日までの総入館数：641,122人

	合 計			曜 日 別 内 訳								
				火～金			土			日		
	日数	人 数		日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
総数		子ども										
1月	22	6,222	856	14	3,392	242	4	1,308	327	4	1,522	381
2月	22	8,344	1,121	14	4,671	334	4	1,849	462	4	1,824	456
3月	25	10,394	1,789	18	6,580	366	4	2,102	526	3	1,712	571
4月	24	12,308	1,777	15	5,752	383	5	3,544	709	4	3,012	753
5月	23	13,856	2,073	13	4,991	384	4	3,028	757	6	5,837	973
6月	25	11,864	1,354	17	6,331	372	4	2,560	640	4	2,973	743
7月	26	10,442	1,409	16	5,464	342	5	2,379	476	5	2,599	520
8月	25	12,496	2,325	17	8,040	473	4	2,194	549	4	2,262	566
9月	24	10,384	1,105	16	5,683	355	4	2,247	562	4	2,454	614
10月	25	10,628	1,362	15	5,177	345	5	2,522	504	5	2,929	586
11月	23	12,474	1,541	15	6,906	460	4	2,748	687	4	2,820	705
12月	21	8,589	877	13	4,383	337	4	2,411	603	4	1,795	449
合計	285	128,001	17,589	183	67,370	368	51	28,892	567	51	31,739	622

1)-b 来館者統計（グラフ）



2) 「資料室」利用統計

	利用状況			資料室別			
				第1資料室		第2資料室	
	開室日数	人数	平均	人数	平均	人数	平均
1月	18	864	48	565	31	299	17
2月	18	847	47	568	32	279	16
3月	22	1,137	52	698	32	439	20
4月	20	1,036	52	654	33	382	19
5月	18	1,338	74	855	48	483	27
6月	21	1,284	61	846	40	438	21
7月	21	1,248	59	841	40	407	19
8月	21	1,417	67	942	45	475	23
9月	20	1,282	64	826	41	456	23
10月	20	1,126	56	745	37	381	19
11月	19	1,284	68	838	44	446	23
12月	17	969	57	651	38	318	19
合計	235	13,832	59	9,029	38	4,803	20

3) 本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

4) 「子どものへや」利用統計

	利用状況						
	開館日数	人数	平均	大人		子ども	
				人数	平均	人数	平均
1月	22	3,214	146	2,360	107	854	39
2月	22	4,280	195	3,244	147	1,036	47
3月	25	5,448	218	3,795	152	1,653	66
4月	24	5,888	245	4,304	179	1,584	66
5月	23	7,182	312	5,304	231	1,817	79
6月	25	6,060	242	4,654	186	1,406	56
7月	26	5,679	218	4,205	162	1,474	57
8月	25	8,068	323	5,537	221	2,531	101
9月	24	4,951	206	3,809	159	1,142	48
10月	25	5,301	212	4,026	161	1,275	51
11月	23	5,899	256	4,604	200	1,295	56
12月	21	3,929	187	3,063	146	866	41
合計	285	65,899	231	48,905	172	16,933	59

5) ホール入場統計

	利用状況		
	開室日数	人数	平均
1月	22	2,508	114
2月	22	3,595	163
3月	25	4,310	172
4月	24	5,002	208
5月	23	6,580	286
6月	25	5,547	222
7月	26	4,723	182
8月	25	6,769	271
9月	24	4,896	204
10月	24	4,828	201
11月	23	5,847	254
12月	21	4,103	195
合計	284	58,708	207

※1/22、5/28、9/3は午後休室、
10/18は全日休室

6) 複写サービス利用統計

	来館複写		郵送複写		計	
	件	枚	件	枚	件	枚
1月	226	4,519	23	43	249	4,562
2月	235	5,945	62	305	297	6,250
3月	262	5,383	30	231	292	5,614
4月	591	3,501	43	171	634	3,672
5月	856	3,702	11	225	867	3,927
6月	646	5,121	196	424	842	5,545
7月	856	5,384	32	176	888	5,560
8月	1,149	7,092	30	176	1,179	7,268
9月	632	3,280	38	210	670	3,490
10月	618	3,886	216	684	834	4,570
11月	946	5,389	101	590	1,047	5,979
12月	651	5,669	248	552	899	6,221
合計	7,668	58,871	1,030	3,787	8,698	62,658

※4月より統計が変わり、件数は原則として冊数を採用

7) 資料出納統計

	出納 (第1+第2資料室)	
	件	冊
1月	770	2,280
2月	1,238	3,179
3月	1,304	3,069
4月	1,030	2,758
5月	982	3,513
6月	1,233	3,586
7月	1,520	4,114
8月	1,570	4,218
9月	1,139	3,216
10月	1,325	3,635
11月	1,811	3,741
12月	838	2,561
合計	14,760	39,870

8) レファレンス統計

		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
情報源・文献紹介	文書	5	6	8	4	6	6	6	10	5	12	7	8		83
	電話	4	3	5	5	8	3	3	2	5	6	9	6		59
	口頭	14	10	11	8	13	43	13	16	8	13	21	13		183
簡易な事実調査	文書	3	3	4	3	3	3	1	19	3	7	2	1		52
	電話	2	7	2	11	2	6	9	7	4	3	9	3		65
	口頭	4	6	9	7	11	7	8	10	5	8	8	5		88
書誌的事項調査	文書	4	10	10	2	6	7	6	10	4	6	11	9		85
	電話	3	3	2	5	3	2	6	8	2	4	4	1		43
	口頭	1	1	5	4	4	3	9	4	3	5	2	1		42
所蔵調査	文書	2	2	2	5	5	5	1	1	0	4	2	14		43
	電話	19	30	26	31	34	29	23	44	19	23	14	18		310
	口頭	17	19	29	47	51	39	51	40	30	32	58	19		432
所蔵機関調査	文書	0	3	1	3	1	1	1	1	0	1	5	2		19
	電話	1	3	6	3	7	0	2	1	1	2	0	1		27
	口頭	4	1	5	4	3	4	5	11	11	4	3	2		57
類縁機関案内 (*1)	文書	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0		4
	電話	—	—	—	1	8	3	5	0	0	2	4	0		23
	口頭	—	—	—	2	6	2	1	1	2	0	3	2		19
利用案内・その他 (*2)	文書	0	1	1	1	3	2	1	2	0	2	1	1		15
	電話	17	21	15	25	32	36	25	33	32	32	24	15		307
	口頭	102	95	92	130	210	233	202	171	134	137	155	95		1,756
小計	文書	14	25	27	18	24	25	16	43	12	34	28	35		301
	電話	46	67	56	81	94	79	73	95	63	72	64	44		834
	口頭	142	132	151	202	298	331	289	253	193	199	250	137		2,577
総計		202	224	234	301	416	435	378	391	268	305	342	216		3,712

*1 「類縁機関案内」の電話、口頭は4月より採取

*2 「利用案内・その他」の口頭には「機器操作支援」、「検索援助」を含む

9) 資料貸出統計

	国会・行政支部図	図書館間貸出	展示会貸出・その他	合計
	冊	冊	冊	
1月	0	15	1	16
2月	0	21	33	54
3月	1	38	117	156
4月	0	13	41	54
5月	0	25	7	32
6月	2	34	16	52
7月	4	35	15	54
8月	0	32	4	36
9月	1	10	13	24
10月	0	46	12	58
11月	0	51	16	67
12月	0	20	9	29
合計	8	340	284	632

10) 国際子ども図書館見学統計

	企画協力課		児童サービス課		合計	
	件数 (件)	人数 (人)	件数 (件)	人数 (人)	件数 (件)	人数 (人)
1月	10	44	0	0	10	44
2月	19	240	5	161	24	401
3月	20	145	6	328	26	473
4月	12	158	3	12	15	170
5月	17	211	8	30	25	241
6月	21	262	1	7	22	269
7月	23	170	3	44	26	214
8月	27	246	2	107	29	353
9月	24	294	3	28	29	352
10月	19	272	2	100	21	372
11月	18	257	3	150	21	407
12月	16	139	1	71	17	210
合計	226	2,438	37	1,038	265	3,506

11) ホームページ訪問者統計

	1日平均	1日ページ参照平均	月訪問者数	月ページ参照	再訪者数
1月	1,309	4,080	40,580	126,487	3,758
2月	1,331	4,431	37,270	124,070	3,519
3月	1,250	3,940	38,771	122,158	3,571
4月	1,426	4,313	42,806	129,408	3,776
5月	1,576	6,196	48,856	192,096	4,285
6月	1,870	8,238	56,110	247,144	4,908
7月	1,932	7,115	59,911	220,565	4,945
8月	1,949	7,048	60,436	218,492	4,674
9月	1,915	6,496	57,450	194,887	4,321
10月	1,926	6,543	59,732	202,861	4,635
11月	1,750	6,247	52,502	187,436	4,202
12月	1,619	5,252	50,203	162,834	3,835
平均	1,330	4,787	40,667	146,310	3,298
合計	15,963	57,448	488,006	1,755,723	39,581

これから...

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

<2006年>

- 1月 学校図書館セット貸出し「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」貸出し開始
- 1月28日～7月2日 展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」
- 3月25日・26日 春休みおたのしみ会
- 4月22日 講演会「児童文学に見る子ども像—もじゃもじゃの系譜」（仮題）（※「子ども読書の日」（4月23日）の関連行事を兼ねる）
- 5月5日 こどもの日おたのしみ会
- 7月1日・2日 七夕おはなし会
- 7月中旬～2007年1月下旬 展示会「北欧展」（仮称）
- 7月中旬 展示会関連催物
- 7月29日・30日 夏休み子ども向け催物
- 10月 児童文学連続講座
- 11月 展示会関連催物
- 12月24日 冬休みおたのしみ会

<2007年>

- 1月 学校図書館セット貸出し「世界を知るセット」（小学校高学年向き）貸出し開始
- 2月上旬～9月上旬 展示会「大空を見上げたら」（仮称）
- 3月1日 『国際子ども図書館の窓』第7号刊行
- 3月17日・18日 春休みおたのしみ会

年間を通してさまざまな行事を企画します。詳しくは当館ホームページ
(<http://www.kodomo.go.jp/>)をご覧ください。下記へお問い合わせください。

国際子ども図書館 TEL 03 (3827) 2053

利用案内

☆来館利用案内

- 利用できる人 どなたでも利用できます（ただし第一資料室・第二資料室の利用は18歳以上の方に限られます）。
- 所蔵資料 国内で出版された児童図書、児童雑誌、外国語の児童書、児童書関連図書・雑誌等。
- 資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
- 資料請求 9：30～16：30（於 第一資料室・第二資料室）
- 開館時間 9：30～17：00
- 休館日 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）。年末年始（12月28日～1月4日）、資料整理休館日（毎月第3水曜日）。
- 休室日 休館日のほか、以下の日が休室日となります。
2階 第一資料室・第二資料室：日曜日
3階 本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

☆レファレンスサービス

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせについて、所蔵調査、所蔵機関調査、書誌的事項調査、簡易な事実調査、文献紹介等を行います。申込み方法は、以下のとおりです。

- ◆直接来館 第一資料室・第二資料室にて受付
 - ◆文書レファレンス 郵送または最寄りの図書館経由（ファクシミリ）にて受付
 - ◆電話レファレンス 資料室開室時間中のみ
- ※電話では所蔵調査、利用案内、書誌的事項調査（目録記載程度）などについて件数を限って受付けています。資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆複写サービス

著作権法の範囲内で、国際子ども図書館所蔵資料の複写（有料）を申し込むことができます。

◆来館による申込み

その日のうちに製品をお渡しする即日複写と、後日製品を受け取る後日引渡し
しの複写の二種類があります。

申込受付時間 開館日の10：00～16：00（後日渡しは16：30まで）

製品引渡し時間 10：30～12：00、13：00～16：30

後日引渡しについては、郵送により製品を受け取ることもできます。この場合料金は後払い（振込）となります。

即日複写は、電子式複写（普通のコピー。白黒・カラー）で、1回につき80頁以内の申込みの場合に限ります。80頁以上の電子式複写、マイクロ複写（複写過程に撮影作業のある複写）は後日引渡しとなります。

◆郵送による申込み

国際子ども図書館ホームページ掲載の書式を用いて、郵送による複写の申込み・製品の郵送も受付けています。料金は後払い（振込）です。詳細は国際子ども図書館資料情報課情報サービス係までお問い合わせください。

☆資料の図書館間貸出し

国際子ども図書館には、所蔵資料をお近くの公共図書館・大学図書館に貸し出す「図書館間貸出制度」があります。図書館間貸出しは「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となりますので、お近くの図書館までお問い合わせください。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など、貸し出しできない資料もあります。また、貸出し資料は借受館の閲覧室内での閲覧のみとし、借受館での複写はできません。

☆図書館見学ツアー

「としょかんコース」（毎週火曜日）と「たてものコース」（毎週木曜日）を実施しています。いずれも14時開始です。参加ご希望の方は、開始10分前までに1階事務室でお申込みください。また、このツアーとは別に、見学も行っています。詳しくは、企画協力課企画広報係までお問い合わせください。

※児童・生徒の見学については児童サービス課児童サービス係までお問い合わせください。

☆学校図書館セット貸出し

子どもの読書活動において重要な役割を担う学校図書館への支援を目的として、テーマごとに40冊から60冊で構成する資料のセットを貸し出します。

◆セットの種類

◎韓国 ◎北欧 ◎カナダ・アメリカ ◎アジア（中国・東南アジア諸国）
（各セットとも小学校高学年向きと中学校向きの2種類）

◎世界を知る（小学校低学年向きのみ1種類）

※平成19年1月から「世界を知る」（小学校高学年向き）の貸出しを開始する予定です。

◆貸出期間：1か月間。（郵送にかかる日数を含む）

◆費用：セットを当館に返却する際の送料。

その他、詳細については、当館児童サービス課企画推進係（内線308）までお問い合わせください。また、当館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）をご覧ください。

国際子ども図書館の窓 第6号 2006.3

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 平成18年3月1日発行
編集責任者 村山 隆雄
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No. 006 March 2006

Contents

Frontispiece: Activities of the ILCL in 2005	
Foreword	Takao Murayama 2
Symposium : "For a Wider Dissemination of Books for Children with Disabilities—Collaboration between Libraries and Publishers"	3
Part 1: Keynote speech "How to publish easy-to-read materials —Experience from Sweden"	Bror Tronbacke 5
Part 2: Reports from other panelists and discussion	Hisako Kakuage 13
Exhibition "Russian children's literature—from folklore to contemporary fiction"	Exhibition Team 19
Exchange of children's literature between Paris and Moscow—to the Exhibition "Russian children's literature" held at the ILCL	Hideko Suematsu 23
Report on the 2005 ILCL Lecture Series on Children's Literature —utilizing the collection of ILCL —History of Japanese Children's Literature	Planning and Cooperation Division 28
Crepe-paper books (chirimen-bon) from the ILCL collections	Maki Eguchi 30
Renewal of ILCL website	Planning and Cooperation Division 31
More materials available on the ILCL Digital Library of Children's Literature and the Union Catalog Database of Children's Literature	Resources and Information Division 32
Visit to libraries in Malaysia, India, and Thailand	Rie Masuda 34
Memorable days in Ueno for a librarian from Fukuoka	Hideko Sakanashi 36
ILCL activity report	37
ILCL in figures.....	45
Schedule	50
User's guide.....	51
